

七二

さてかねて御配慮にあづかりし念珠の製造につきて淺草門跡前紀伊國屋に申付候。一萬連百六十圓にて製造することに約束致候。明年(註一明治四十五年)一月頃までには一萬連出來申候との事。

七三

觀世音の表示。

觀音は如來と衆生との媒介者である。

如來即ち親が子に對して母のように慈悲をかけて子を養ふすがた。また如來にむかふ時は兄弟姉妹の兄弟となりて弟妹たる衆生を手携ひて如來に導いて下さる故に、兄弟なれば弟は兄にならなくてはならぬ。

觀音が信仰者の模範を示し頭にミダを頂くは信仰心中に如來を常に憶念することをあらは

し、如來我にあれば麗しき顔常にあらはるゝことを表し、注水は如來心光の法水衆生の三垢を滌ぎ清く新にしてまた新ならしむるの表示に候。

毎々筆をとること多いので、ヨハイ腕がヨハリマシタカラ是で御免被下度候。

七四

聖き名によりて

みおやのふかき御恵みを感謝し上候。

聖きによりて我が敬愛する所の加納操子きみよ、亂筆ゆるし給へよ。

きよきみひかりのなかに、いと御うるはしき御ひぐらしにあらせられ候こと、こよなき喜ばしきことになむ。さて此ほどは御懇切なる御玉づさにあづかり直に御報ひまつるべきはづのなかに大に延々になりしことは寔に慚謝しまつる所、希くは我が爲に恕し玉へよ。御書中に御嶽中學校長八木君の御意見のことも承り候。同君の御意見の如く婦女子の教育は最も困難の事に候はむ。よりは育兒院の方が好結果を來すならん哉。或は然らん。何れにか、天に

まします みおやの聖慮ましますらんと存候。御同君は教育家として有望の人たる由そは慕はしき仁にて候。

次に豫て承り及び候御孫の御男子の件につきてはついにまだ何れへも照會いたさず候。

(中略)

愚衲にも本年より宗學へ入校すべき徒第一人、また他より一名曾て約束いたし候、何れにしても自分が多く他出、弟子まかせのことなれば思ふように教育も出來ず候。

(中略)

何れにしても御因縁上のことにて候へば歩々に近づきつゝ有ことにて候はむ。なれどもまだ熟せざるほどは何れの所とも分らず候。

仰の如き御都合も候はむ、然らば御心痛のほども御察申上候。

(後略)

七五

御書翰誓願寺より傳へられて拜見仕候。

本年(註—明治四十一年)五月十六日フトした因縁により善光寺詣でがてら長野縣に出。長野市は今より十八年前に結縁し久しぶりにて傳道いたし、七月八日に上州高崎に歸途の傳道を試み候。當市もまた十八年ぶり何れも時至りたりとや申さん有爲の士女に宗教心の勃興したることはまことに悦ばしきことにて候。

長野市にても佛教新報社長などが發起となりて有爲の人物を集めて講習を請ひ或は學校にまたは青年會に至る所に於て佛教を歓迎するの徵著しく候。

上州はもと無佛教の地たりしも高崎市の如き市長内田氏夫婦の如き熱心に修養會を組織して有爲の士女をして法味を味はしめ、また沼田町などにしても町長郡長ともに青年會を催して佛教をすゝむる如き昨日まで〇〇の木に忽ちに爛漫たる櫻花の咲ける如き無宗教の乾燥無味の精神界に忽ちに靈光赫々たる宗教心の花開くとは時到れば實に不可思議のものと感じ

候。

本年は關東は到る所に大洪水の慘狀實に言語道斷の事にて候。愚衲八月十日頃より上州深き山奥に入りて傳道を試み折しも水害甚しく、上州の奥のことなれば橋梁落ち道路崩墜し行くも歸りも道たえて、上州の山奥に八月四日までとまりて再び高崎市に歸りしは廿四日になり候。昨日高崎市を發して車中目に觸るゝ所、田畑は悉く流失或は水窗、鐵橋墜落家屋流失破壊、其慘憺たる光景言語に斷え候。

大みおやの恵みに充さるゝ天地の間にも斯く恐ろしき惡魔が伏在せる哉と存じ候へば、我々も

大みおやの御恵みを歎びつゝある精神に、煩惱の惡魔を發して心田を荒しはたす如きことをば、深く慎まねばならぬと大に教訓を蒙りて候。

さて御玉章に接し實に懺悔に耐えざること春以來ついで御無音のみにうちすぎ、傳道上東に出れば西を不能にし、西に向へば東は怠り、何とも申わけなきことに候。

(中略)

同尼は今より十年前には三澤てふ所の庵にありて傳道に従事せしも、同所は習慣上死亡者の追弔的法務に時間を削らるゝの恐あるを憂ひ、更に松代町の有爲なる有志者の請によりて活ける士女の傳道館を舊松代藩主の城跡に建設し、専ら傳道に盡せり。傳道年久しきにますく信者の信念を堅牢に完成せるが如し。ひとり傳道に熱するのみに非ず嶄新なる傳道思想を以て宣傳す。

(中略)

世はいける光ある佛教を請求せり。之を與ふる宗教家に乏しきは實に遺憾のことに候。

(後略)

七六

欽復御書翰拜見仕候。歸東以來大に御無音多謝候。先月廿二日愚衲の生地にて五重傳法會を執行し、其當時以來夜を日に續きて傳道用に忙殺せられ、此夜の短きに十二時前に就擲せしこと更になく、是も聖旨に仕えまつると存じ候へばかたじけなきものゝ、随分い〇〇〇〇

感じ候。

(中略)

豫ねて御病に罹り玉ひし徳順法尼廿四日正念に御命終との事、御庵室のためには惜しき方に候へども、苦の娑婆をすてゝ、常樂の都にいたりしことはまことにめでたきことに存じ候。

將來我國民としてまた同胞とし、親愛すべき御地の婦人衆の爲に、復活の曙光として、拂曉ちかきにある貴會は曙光の先驅として、吉森女史の初音の美音を聞くにいたりしはめでたきことに存じ候。

近來東國に於ても青年傳道の聲は何れの地に於ても聞くことをうるにいたりしは是まつたく吾日本國民の精神界に復活の機運が到來せし徴候ならんと悦び候。東國に於ても所々にて青年の傳道團をつくり候決心にて候。

如來の光は普く一切の所に照しわたりあれども只信仰の眼なきもの自ら之を知らざるのみ。すべての人に正しき信仰の眼を開かして如來の光の中に光榮をあらはすべきつとめを果

すようにならまほしく候。

實に世の人々は生れがたき人界に身を受け、遇ひがたき佛法に遇ひながら、さりとは知らで空しくまた三塗の闇黒に心の足をむけるもの多し。實に遺憾此上なきことゝ存じ候。

七七

日かげのこまのあしなみいとはやく、もはや今年も暮にけり。一たび袖をわかちてより、かぞふればはや四年とはなりにけらし。過にところは御ふみをかたじけなふしたるを、その頃かたいなかの新開地に趣きて法を布き居たるため、漸く此ほど拜見いたし候。甚だのびのびのこと慚謝仕候。

承り候へば、かねてちぎりし友だちがたにも、追々に炎浮の露命を彼の清き御國の蓮の華の上にくつしかゆるかたの多くなりけるは名残こそ惜しけれ、さりながらやがて西土の再會を思へば、唯忘れがたきは御親の御そばにて候。

女人會ならびに青年會は益々盛大のよし歡喜此事に候。さて五とせのむかしを思ひ何とな

く飛びたつばかりにもおもひ候へども、まゝならぬこと、いつかあふて法の物がたりを俱にせむこそたのしみに候。

さて當地方にて青少年に宗教思想を養ふため樂器を求め佛教唱歌また讃歌等にて淳美なる思想を養ふことにいたし候。至る所にて寺院にオルガンを備へ付くることにいたし候。御寺にてもオルガンを御備へ置て青少年の宗教思想を養ふことにいたし候よう、いかゞにや。佛教唱歌を御送付候願くは青少年衆へ御配付下されたく候。4/4ハ調にて候。

また近日に無量壽經の中如來光明歎徳章御送付候間是また御配付下され度候。斯の御文は最とふとき御文なれば、日々拜誦して如來の御徳を讚美し奉ることにていたし度候。

會員衆へよろしく御つたへあらんことを希候。

この御經よむたびごとに思ふかなちぎりし友の深きまことを

こゝかしこ身はへだつともちぎりてし心は同じきよきみそのに

七八

さて兼てより御催の畫會も近く相成候に就て、觀音の聖影をしたゝめて上ることは大に功德に成り候事故、悦で書いては上るにしても、畫會に出して畫家と共にして有志にわかつといふ事に就いては信者中に大に反對を唱ふる向も有之、依て自分も考へて見ると、矢張りそんな様に思わるゝから、畫會の外に全く信仰の有志に頒ちて賛助を望む事にした方が法であるかと存候。よくよくお考被下度候。ソウで有〇〇やう畫家連と一所にしたのでは、觀音様だつて、キツと、眞面目な御顔して絹地の上に出て呉ぬダロウと存候間、願くは左様御承知被下度候。何れ書て上る事は悦で致しますけれども、觀音様がいやだからまだあとにせよと仰シヤタカラドフカ暫く御待ち下され度候。

今度當芝の學寮に居て一生懸命に光明宣傳に盡すつもりにて候。

七九

(前は略)

愚衲事先月中旬頃より腸胃の病氣にかゝり當地に於て先年來宗教上に因縁ある栗本醫師の藥用いたし居候。別に苦惱の感ずる事は無之候へども下痢が度々有之、どふもはかゞしく治し難く殆んど是には困却いたし居候。

さればとて、如來より賜物の中最も貴重なる時間を空しく捨るに忍び難く、○しつゝ爲すべき事は怠らず働き居り候へども、下痢の氣分の悪きには随分いやなものにて候。

始めには寒さを引こみたるならん位に醫師も見込んで居りしが、只今にては或は腸カタルなりやとも申居候。左様な譯にてあれば、何とか此病氣をかたつけぬうちには外出活動も見合した方がよかるべしと存候。何れ其内に何とかなることゝ存じ候。(後略)

欽啓、初冬稍輕寒を覺へ候折、尊師益々御清祥の段奉賀候。貴書並島田上人の御書翰拜見候。該當麻無量光寺の件、若し、

如來の聖意に稱ふとなれば御兩師の仰の如くに悦び拜受仕べく候。實は愚衲の傳道の生命とする所は時期相應の道を開きて我國民を新しき如來光明の靈的生活に入らしめんと欲する所にあり。自己が如來の使命と自信して宣傳する所が或は在來の本宗の教權の軌を脱すてふ下に、たとへ其籍を奪はれても自信と主義は變更すること能はず。依つて傳道の便利上本宗の籍を出て小さき教會なりとも全く主義を主張する方がよろしき哉、または自信と主義を主張するも差支なき門派に入りて飽まで努力せんかと、竊かに如來の聖意の在る所の命令を待ち居る様な今日の場合なれば、若し同寺なれば主義主張に差支なかるべし、という御見込あれば實に是如來の使命として難有、御受け申上べく候。自己の理想は

彌陀無量光如來の光明の下に一切の人類を攝化せんとの、しかも現在を通して永遠の無量壽

界に歸入せしめんと主義にて候。

愚衲が微衷を明察し愚衲の爲めに如來の使命を果さしめん爲に之を保護し下さると云ふ思召なれば、御兩師は全く如來より使はし給ふ護持の兩菩薩と仰ぎて御勸告に一任仕り候。

全く愚衲の生命は唯

如來の光明を遍ねく衆に及ぼし現在より光明生活に活かしめんと云ふ所に之あり候。之がかなふことなれば、すべては宜敷御任せ申上候。

先は御勸告に隨がひ愚衲の意見を吐露し候。

八一

蕭白年末の際定めで御多忙に被爲在候事と察上候。過日兩上人の御配慮にかゝる無量光寺の件は

如來の御聖意に隨順し且つ兩上人に一任候。何れになりゆくも皆聖意の然らしむる所と拜し候。愚衲の主義の爲には無量光寺は相應候事と存候。此點からすれば御配慮の程願はしく

候。

遊行坊廿五日頃歸京致し度所存なれども何れに成る共御一任申上候。東京の暮と一月はじめの人間界を超えたる舊曆の田舎にて遊行させて一月半まで御ゆるし下されば實に有りがたき事と存じ候。あまり勝手がましく存じ候へども右願はしき迄に端書にて御返事下され度候。

八二

欽復京都知恩院別時三昧終了途次三四ヶ所傳道をなし一昨日歸京候、却說當麻山晋山式に就いては其前現山主並に阿川上人に親面の上に篤と自分の主義また前途の方針等を陳述し、實は愚衲も自己の使命たる將來の國民を彌陀の慈光の下に攝取せんとの宣傳は是自己の生命とする所、新しき道を開かざれば逆も未來の國民を攝受することは出來ずと信じ候。就て〇〇も其開通得〇するにつき若し差支あるが如きは自分の生命をして自殺する〇〇〇之に就き充分御協議いたし度、何れ日を選んで兩上人に御面會を仰ぎ度候。

八三

拜復御山主前には御輕安に在らせられ候條遙に奉賀候。

仰せ越され候板橋乘蓮寺住職名義の儀にて若し辨榮の名義を附置候事が小川の遺族其他御法類の衆に於て便宜上宜敷との御見込ならば其御意に順ふべく候間宜敷御取運び被下度候名のみにて寺役等の務められぬ事は今更申上候迄も無之候へ共御承知置被下度候、もつとも信仰の道を教ふるだけのことはたまには致すべく候。

八四

大なる御めぐみのみおやに恭しく感謝し奉る。さて此頃の御書翰によりて觀すれば、御主人の出征後は晝夜といはず君に報じ國家に酬いる御志より全身全力をこれに竭しなさるとは實に男子をして慚死せしむる御つとめのほど感服の外これなく候。其御志は實によみすべし。なほはげみてもと御すゝめ申すべきことなれども、しかしながら忠にして義なる貞にし

て孝なる井深氏よ。雷に眠を忍び疲れたるを耐ふるばかりが國家につくすではありませぬぞ。婦人の天職は其よりはよほど重きものがあるのでせう。其御妊娠のソレを養ふためにはあまりに精神をつかふことは精神發達の要素を養ふ害になります。また身體に無理をしますと胎内の體育にさまたげになります。それですから未來の國民たる子の身心を養ふことは御生後ばかりではありませぬ。胎内にて成かぎり充分に養はなくてはなりません。滋養分は出來るかぎりは充分に攝取しなざるがよろしいのです。牛乳は胎内の小兒の爲に用ひなされ。また出産後といへどもアナタが牛乳を用いてそれをアナタの消化機にて同化して乳として小兒に與ふるようにしなさい。それでもアナタに乳が出なくばそれはいづれでもよろしいのでしやうか。

婦人としては家事も大事、殊に困難の時局にしてあればそれが爲につくすは大事には相違なければども、婦人のつとめとしては、最とも大切なるは身體精神共健全なる兒を造るは最も○ければなりません。

それにつきては愚衲は井深家の遠き御先祖になりかはりまた清國に御座る御良人になりか

はつてアナタに御さとし申すのであります。

ことに其御胎内にあるは御良人の子にはあれども、靈は天地萬物のみおや即ち如來より御あづかり申上げたのでありませう。であるからなるべく健全に育て上げなくては其みおやに對しても不孝ではありませんか。決して一ばんの大事と其次の大事とを顛倒してはいけません。此頃の寒さに向うて夜分など寒いのに無理をしてはなりません。軍人は軍人としてのつとめで、婦人は婦人としてのつとめである。鶏卵をあたゝめて居る牝鳥を御らんなされ。巢にこもりて忍んであたゝめて居るではありませんか。かの鳥が外に出て餌を拾ふのがつとめであると思ふてあたゝめることを忘れてしまふたならば、決して世つぎの子どもは育ちませぬ。よくよく思ひなされよ。アナタは、無理に忍んで二月三月のつとめをするのと、健全な人間を一人造りて一生のつとめをするのと比較が出来ますか。決してあやまつてはなりませんぞ。

そこで私達にへだちてゐて氣つかひに思ふのは（　　）之もよくマア忍耐しなされませ。

むづかしい（　　）の爲にアナタも却つて道徳心がひきおこさるゝのです。人間には肉の幸福

と道徳とは兩方一つかねに取ることが出来ませぬ。舅姑が極く溫和であると知らずくに我がまゝになる。我まゝになれば自然ぜいたくにもなり、氣に入らぬと直に腹が立つ。それから自分が難儀をして見ぬと人に對しておもいやりが出ぬ。勤勉でも忍耐でも謙遜でもすべての道徳なるものは、どうしても氣まゝになる幸福に充ちて居るものは、なか／＼出来難いのである。肉の幸福よりは道徳の方がはるかにすぐれて居るのでせう。種々の逆らふやうな刺戟がなければ忍耐てふことも知らぬのでせう。ですから徳を積むことをよろこびて居らつしやられよ。

楮また御書翰により、井深重剛君の御在所を承つて此程書翰をもつて御訪問までに申上げました。アナタから御申越しの如くに尊きみおやの御じひのほどをわかつて申しのべました。

みおやの大なる御慈悲は君が御留守を貞にして義にして家を守る處の御内室春枝きみの胸に在して安慰を與へ給ふことを君よ願くは御内室の爲にみおやに感謝し玉へと。

春枝きみよ。愚衲は他に再び御良人重剛君に寄するに此言を以てせんとするけれどよろし

きや否や、アナタに替つて申述べます。

みおやよ、今妾がさびしきころに對してあたゝかに安慰を與へ玉ふ如くに、國の爲君の爲に戦地に在る吾良人に安慰を與へ玉へよ。夜も晝も妾を守り玉ふごとくに吾良人を護らせ玉へと。

また重剛君よ、君の御内室が君が無事と幸とをみおやに祈る如く、君もみおやに對して家室を守る御内君の幸をいのり玉へよと。

みおやの大なる御めぐみは所として充滿せざる處なきが故に、清國に在る重剛君の胸裡に安慰し玉ふも、御留主を守るアナタの胸中にかゞやくも、下總の小金が原の草庵にある榮が胸にやどり玉ふも、同一の如來の御慈悲にてましましやう。愚衲は深く祈念し奉る、やさしき且つ貞なる義なる春枝君に安慰を與へ玉はんことを。

なほ信仰のことにつき申のべたきこと候へ共後便にゆづり候。

精神のことにつきてはひとへに御めぐみ（ ）みおやのみころに御まかせ奉るやうに。

またからだの事につきてはやはりみおやの賜なれば御大切になされよ。

燈籠のうた

こゝろのやみのふかきをば

とうろうのひこそてらすなれ

みだのちかひをたのむみは

てらさぬところなかりけり

八五

みおやなる如來よ。大なる御めぐみをもて吾同胞に安寧を得んことをいのりたてまつる。
小心翼翼として貞操をもて室をまもり忠と貞とに勇なる井深春枝子のために安きをあたへられんことをいのりたてまつる。

みおやのふかき愛をかふむりし春枝きみよ。安かれよ。安かれよ。わたくしはおもひながら御たづね申すことをよういたしませぬはまことにこゝろがよりでした。なにかと御こゝろ

のやすむひまなきことならむといつもさつし上げます。御産の成績はいかゞでしたかしらまほしく存じ候へども意を得ませず。御産後はいかゞでしたかまたこのごろの御さむさにいかゞあります。御主人はこの頃いかゞで御消息がありますか。わたくしも其在所を承りたる御座います。願くば御良人のためにみおやのみひかりと御めぐみにあつからんことと其安寧をいのりなされよ。

さて人の生涯は重荷を負ふて遠きみちをゆくが如しと家康公がいはれしごとく實にしかり。重荷を負ふてゆく道中にいつも平地ばかりではなく山坂もあれば随分難澁なところもあります。しかれども坂を越え峠を過ればまた平地ありでありますから、やがて来る平和安穩の日も有るものにしあれば、それをたのしみて御くらしなされ。山坂の難儀あればこそ平地の安きを覺ゆるのであります。難儀も辛苦もしませぬものはまことの幸福も感ぜぬものであります。

かね／＼申しました如く、國家のためと申すは無理にからだをつかふことではありませぬから、かへす／＼も御身御大切にたゞ／＼みおやの如來さまの御じひを感じて御わすれなら

ぬよう、いづれまた申上ませう。

八六

聖きみひかりをもていつも照さるゝ身のほどをわすれたまふな。夜も晝も、いつくしみのふかきみおやなる如來は目には見へねど愛護し玉ふことをおもひ〇〇忍びがたきをしのび耐えがたきを能く堪ふ御身のために御めぐみのふかきみおやはいかに御じひの心をかけなさるのでありませう。

たゞたふとき御名をとなへて御めぐみにあたゝめられんことをいのりなされ。かんなん困苦は精神をきたゆる道具であります。鐵を見玉へ。かちやに百たび千たびまつ赤にやかれてはまたたゝかれてきたへ上げられたる鐵は名劍となつて賣とせられ、火にも焼かれずたゝかれもせぬ鐵はくされてしまふ。

みおやのふかき御じひはふかきなやみとまたたのみをふかくするところにかゝることまたふかし。

八七

良に惟れば有爲の世のさま生住異滅をし遷りて須臾もとどまることなく、日蔭の駒のあしはやく命は山の水よりも迅し。しかれば明けし年の初の日よりもまちわびたる櫻の花ははや夜半の嵐にうつろひぬ。古人は年々歳々花相似、歳々年々人不同との口吟みより想ひみればまた花をなどあだにはかなしといふべけん。我身の日夜に（　）ることさへ自ら覺らず省みずしてうか／＼と過ごしゆく人々の其行くえのほどいかゞぞとおもへば、人も我もみな同じ事ながら、われらは何の幸ぞや、無量億劫にもあいがたき佛の法にあふことの悦ばしきにあらずや。何事も有爲の法は夢幻泡露のあだなるものゝみにて一として眞實堅牢なるものはなきに、ただ佛の法のみ眞實不虛の法をしめしたまふ。なかに、門はかぎりなくわかれたれども、最も捷徑なるは唯佛の徹底の大悲力を盡して教へたまふ

南無阿彌陀佛の一法。

決定して深く信じて吾我の妄にして唯罪惡の元なれば一毫微塵も取りどころなしと。たゞ

仰いで深く信ず萬徳圓滿の阿彌陀佛に歸し奉りて投じて少しものころなくば、この無始妄執いつしか彌陀の光に消はて、心は彌陀の大光明中にありて、吾もなく彼もなく、唯あみだ佛の光明遍照となるを念佛三昧とも三業相應とも。

阿彌陀佛は元より照したまへども、我ら無始の煩惱に碍へられて見ず知らずして無明長夜の中にさまよふ。一心不亂に名號を執持して三昧相應するときば無始のやみはれて大光明世界に逍遙すべし。行住坐臥念々不捨、なむあみだ佛。

聖經の友

この御教に依りて、信をたて、願を發し、行を起すものは、つい求めむる所西方淨土とし、一心の歸する所は阿みだ佛の本願にあり。行住坐臥念々稱名を以て行とす。斯の如きの行者は皆彼の淨土に超生し諸上善人俱會一所の親友なれば、まことにたゞ夢幻泡露のあだし世のかりそめの友などのたぐひにあらじ。願くば同朋の衆よ。今日よりは佛眼を以て相看、慈心をもて相向て互に無上菩提にいたらん。

ここかしこ身はへたつともちぎりてし心は經の園に遊ばむ

この世の習ひなれば此かりの身は東また西のあなたと千重の山百重の雲路をへだつといへども、心はかの淨きみ國に逍遙するのおもひ、豈たのしきにあらずや。

よむ聲に心も共にさそはれて樂しき園にめぐりあそばむ

この經に説きたまふところの御言ばに意をとどめてよむときは、かのみ國の七重の寶の林中寶の池のほとりなどに逍遙するの想ひあり。

法の緒を心のたまにつらぬきし御國の友は戀しかりけり

數珠の珠に緒をつらぬきしごとく我ら六のみにちに流轉すべき凡夫も彌陀の名〇の緒が心根の穴に貫き徹して共に淨土一蓮の身となるべきものは戀しきなり。

子をおもふ親のこゝろをしれかしと經のたよりにきくがうれしき

子とは六のみにちにさまよひし我らなり。親とは平等一子の願成就して淨土にまちわびたまふあみだほとけ。經のたよりは、釋尊此世に出興在して西方淨土の因位より果極の今は子のために慈悲のやるせなきを經にときおしへたまふ。このみ教を聞てより悲喜こもくにおこる。我ら釋尊出世の縁によらざらましかば彌陀の悲願いづれの時にか聞くことを得ん。しか

ればいつか三(途)の中いづる時やあらん。悦ばしいかな此法にあひたてまつることを。

ながき夜のねむりもやがてさめぬべしあかつきごとによむ經の音に

ながき夜のねむりとはわれらは無始よりこのかた無明長夜のねむりなり。清きあしたあかつきかたなどに經をよむに、さえくとして眠のさめる如くやがて悟りの期いたりぬべし。

この經をよむたびごとにおもふかなちぎりし友のふかきまことを

よそごとに聞きやしつらんかの國をわがふるさとゝまだしらぬ日は

かざりつゝたれをまつとやおもふらんおやのこゝろを子はしらすして

御ぼとけの法のいともてちぎりけるまことの友はたのもしきかな

くらきよりくらきにまよふ人のためてらすは法のひかりなりけり

八八

拜啓先頃はふりつゞきたる所昨今はきびしく相成候。其後御經過如何に候哉。つねに心にかゝりつゝ居候。

みおやなる如來さまはいかなる方面から御身をめぐみ玉ふやをしり玉ふや。人の親は我身の苦しきにさへもその子をわすれざる如く、天地萬物のいと大なるみおやはいかに子を愛し玉ふことのふかきを思はなくはなりません。日々の明き光も清き空氣も新らしきたべものも皆如來即ちみおやの賜なることを記憶し玉へ。

如來は何の爲にかこの身を活かし玉ふのでありますか。その目的のいかなる處にあるかを思考し玉へよ。人の親たるものその子を養ふて已に年齢至れば學校に就かしむ。兒のために日に三度の食より萬般のことにいたるまで心を配り思を煩はして養ふことは、常に子どもかたちばかりそだてさへすればよいといふのでなく、願くはこの子を教育して成るべきかぎりにはよきひとにせんといふは、親が子に對する養ふ所の目的であります。

若し人あつて私の子どもは三度の食だに食ふてゆきさへすれば知識の方はどうでもよいといふよふな親は恐らくなからうとおもふ。いまもその如く、

如來の大なるみおやは私どもに日々三度のかても空氣も天地間にあたへ玉ひてこのからだを養ふようにして下さるは、たゞにからだばかりのためでなくて、そのいのちのあいだに如來

のきよきみこゝろ深き御めぐみをもてわが心臓を養ひて成るべきはよき聖子として此世に成長せしめて終りには聖なる御國聖のみもとにめしよせて、無上の靈福をたまはんが爲でありませう。

もしもこのかたちのある間にたましひがますく聖く靈(うるはしき)になるよふに聖(たふと)き御名をとなへ聖き旨(おぼしめし)を念じていよくすゝむことにするにあらなくば、五十また八十年間たゞに食ひにげにせんとせば、甚だ不可ではありませぬか。

ますくきよくいよくいさぎよく御光によりて清きひぐらしあらむことこそぞましけれ。

八九

可愛き子のかなしみを見る親のおもひいかゞぞや。天地よりもひろき みおやの如來が若しもあなたにかなしみのあるときに思し召しわつらはせ玉ふその深さをばおもひなされよ。

あなたの御胸のうちのいかにせまり玉ふかは、私如きにても、はるかにさつするにあまり

あり。まして況んや如來が御身のために御慈悲をなやめさせ玉ふことは、いかゞでありませう。

わたくし重剛君の御不在中には御親父君また御母さまとことにあなたのために是非御見舞申したきこと山々なれども意を得ずしてあり候へどもこゝろは何たびとなく御見舞申候。

たゞわたくしはあなたがいかなるばあひにも恐るゝことなき平和なる御こゝろになれがしと みおやの如來さまにいのり候。

曾て申進候とほり、生れたまゝの鐵は決して名刀に成りませぬ。百度火にやかれ千たびきたへられてこそはじめて正宗の名刀とも稱せらるゝのである。

如來さまはあなたをよき器にせんとの思し召よりさまぐの機會をあたへ玉ふのであることをよろこび玉へよ。わかき時に種々の千辛萬苦を経ざるものがかゞしていとよき女丈夫になりましやう。賢婦烈女もきたへし結果であります。氣まゝに日ぐらしをすることを夢にも見玉ふなかれ。活ける如來のなかにありて萬苦を安忍する志氣を聖き御名によつていのり玉へ。

さればとて一時の感情のために御身をそまつにし不養生不攝生なることは必ずなされ玉ふな。御身をば如來さまに仕ふるまた國家のため大切にしなされ。御良人重剛君が御身のために案じなされることも身と心との安きをこそそのぞみ玉ふなれ。わたくしの御身のために案ずることまたこゝにあり。聖き御名によつて安かれよ。

九〇

みおやなる如來よ。貞にして且つ義をもて留主をまもる井深春枝子のために深き御めぐみをもて御まもり玉はんことを尊きみ名によりて祈りたてまつる。

いと親愛なる井深春枝きみよ、安かれ、やすかれ。

みおやのいと大なる御めぐみはもつとも切なる嘆の子の身にかゝることは特に深きことをおもひ玉へ。

やめる子の爲にやるせなき母のこゝろのいかにふかきをおもへばいかに如來のみおやの御慈悲のかゝらせ玉ふことをしりたまへ。

さて御書翰によつて御病氣も追々御快復なされしとの御言葉によりて大に安心いたしました。實は曾て葉書にてしばらく御様子伺ひしに他の方よりの御返書の事ゆえあるいは御病氣の爲め入院なされ候やまたは御實家の方へ御療養のために御出にて御不在ではないかと案じて居り、また今回も御様子がわかりませぬ、心樂庵の方より〇〇つぎをば依頼いたしたのであります。

さて御主人の御不在といひ且つ御病氣といひそのみにても随分重荷の處へ加ふるに〇〇〇〇その御胸臆のうちこそげにおもひやられます。身はへだつとも同情は己が胸中に堪へぬほどに感じられます。

如來に犠牲にそなへたる我身なれば自身のことにつきてはいかなる苦も忍ぶべくも心のよわきは本より婦人の性質なればそのよわきものゝ爲には同情の感情はげにしのびがたくこそ。

御書翰に、また御身體が腫れめまひ等なされ候との御事。それはかたちの上の榮養を充分にするのと、また一には精神を一つうまれかわりて精神から癒さなくてははかゝしくゆき

ませぬ。あなたのやうに病人でありながら日々たゞ徒食するのが苦にするとかまたは國ぞくであるとかそのよふなことをおもふべきは健康な時のことであります。病人が病人の本分を忘るゝからそんなことを苦にするのであります。病氣の時に病人のつとめとは病を治すために滋養をほどよく食ひ、何事も氣にかけずたゞ天地のみおやのおぼし召を念じて、みおやのまに／＼御まかせ申上げて、大きな心となりて氣樂に寝ね起きたくばおき、治るやうにつとむるのがつとめにて自分の心からはやく癒えよ／＼とおもふもむだなこと、また誰へたいし、それへたいし、などゝおもふもそれもいけません。

もふ死んでしまふたものと安心して、誰が何と云ふとも氣にかけなさるな。あなたが今までのころが死してしまつて、今度は如來の御ちからで大きな心に生れかわりなされ。もう死したものと決心したならば何もそう苦になりませぬ。そうなされて心から病氣をなおすが第一法であります。

もう死んだものとおもへばどんなことをされたからとてかまはぬと決心しなされ。そうして天の廣きにみち／＼である如來の御慈悲の光明をおもふて御念佛しなされよ。

次にあなたがいろ／＼心配せんければならぬは全くあなたを出來うるかぎりよき精神にきたへようとの如來の御慈悲であります。

正宗のかたなが本は同じ鐵であるけれども百度千度火にやかれうちたゝかれた結果世の寶となりて居るのであります。

あなたを岐阜縣にて一番精神のよき婦人にせん爲に如來さまよりそれを與へられたのであります。

若し生涯きまゝな生活できたならばとても人倫の徳器とはなれませぬ。そこが辛抱であります。きまゝや榮華はしばらくのほどの夢にて、きたへられたる精神の光は千萬年つきざる寶となるのであります。

あなたを寶となさんが爲にきたへられることを思はずして只氣やすく暮さうと思ふはゆきませぬ。

あなたにこのことを一つ御願ひ申します。あなたも随分せつないでせうけれどもあなたをきたへる方でも随分胸のうちのせつないのはなか／＼でせう。けれどもそれは全く心の病であります。丁度あなたのからだに今病氣あると同じく、心の病氣即ち持病となりしのであります。あなたの病氣はまだ全快がはやいので、〇〇〇の心の病氣はなか／＼難病であるからたやすくはなほりませぬ。

あなたがまことをつくして、一心に如來さまを御たのみ申して、母上の御病氣の平癒を御いのりなされ、まごころをこめていのりなされ。

うらみに思はぬで、〇〇〇にはさぞかし心の病氣がせつないのでありませう。どうか難病をいやして心安くひぐらしが出来るようにしてあげたいとおもひなされ。

實はあなたの徳器をきたへん爲には却つてよいのでしやうけれども、心の病める人は御氣の毒であるから、どうか安らかに無病にして上げたいと思ふて如來さまにいのりなされ。

〇〇の心病の苦みをよくいたしたいためとおもふて自分が氣安く日ぐらし出来るためとおもふてやはり自分勝手に成りますからいけません。

りつばなる名刀となるのにはなか／＼氣みぢかではなりません。氣ながにきたへてもらうほどよいのであります。

あなたはきたへらるゝのはつまらぬ、かように一生しまふのはなどゝおもふのは、その苦がむだになるとおもふから、同じくは氣安くくらしたいとおもふのです。きたへられるのは少しもむだになりませぬ。一回は一回だけあなたの精神の光をますのであります。

多くの人は成るべく氣樂に氣樂にひぐらしをいたし度いとおもふばかりで自心の徳器を作ることは一生の功、無量劫の徳と成るといふことをしらぬゆゑ、小さい考をおこして世がいやになるのであります。

此世へ出て來たのは樂するためであるか苦むためかといはゞ樂するためではなく苦みて徳器となるためにいきて居るので、樂をしたからだは盡る時がある。苦みてみがきたる精神の光明は極樂へゆきてもかどやきて盡る時なき寶と成る。それを知らずして何とかして苦をさ

けようとして樂を食りて只徒らに一生をすごしぬるもの多し。まことに愚のかぎりなれ。

これが爲に徳器と成るとおもふてよろこびなされ。それこそあなたを婦人の鑑となさうとの如來の思召ならむ。

昔から艱難困苦を経ずしてえらい人に成りしためしなし。あなたをよくきたへぬきたるいとよき人にせんとこの如來の思召を深く慮らずして不しあはせと思ふのはまだ信仰が淺いのです。けれども先ほど申したる如く母上の御病氣をなをしてあげるためには一心に如來さまに御いのりなされ。御自分の氣やすさの爲ではいませぬ。

そうすれば自から平和なるあたゝかなる春の園生が家の庭にあらはれます。

隨分氣ながに御辛抱が大事であります。

さればとて御からだの病氣の爲には大きな心にならなくてはいませぬ。病氣の時には氣樂にやすみてよくするのが國家へ對するつとめである。無理なことをして病氣をながびかするは却つてわるい。精神から生れかわらなければ治りませぬ。

如來の大光明の中に於て極樂のこゝろになりなされ。

九二

日中のあつさに引かえて霄の天に吹き來る涼しき風に秋は來にきとしられけり。

靜に願れば二十餘年の其むかし上野信濃に巡教の折に結びし御因縁に催されて、むかしは只柏崎の極樂寺と名のみ記憶に残りしに、此度は圖らざりきも二度迄も折かへして留まりしは實に淺からぬ御因縁と深く感じ候。殊に現在も未來も此長らくの滯留中に御心盡しの御變應に預りしことにつきては實に感謝に耐えず候。

御内室様には長野の出立も時間がおそく相成候へば御地の着も夜に入りて定めて御難儀の事にて候ひしと深く案じ上げ候。殊に旅なれぬ身のことなれば云何にて候ひしやと懸念（まかり）候。愚柄事は松代町に夕方に着し其夜は尙大信寺は例年の地藏祭のことゝて昨廿四日にかけて大に賑はしく候。

廿三日已來御寺の虫干參拜者は日に増し賑はひし事と察し候。

尙地方は先月來雨が少いので今尙井戸水にても渴枯し居る様な次第にて候。随つて作物にもえいきようを及ぼし候事にて候。

伺ふ所によれば御寺院の諸堂宇に至るまで御晋山已來保護に御盡瘁なされ益々回復の運に至りしは全く御愛山の深きに依る處と察し上候。願くは先師故上人の御遺（跡）なれば御愛護の程是祈候。

御内室のきみには先日來くりかへし御談じいたしたる事なれども尙御傳聲願度候事は、宗教家の内助者として模範的に被成候よう一層奮發してつとめなされ候様にねがはしく候。

眞實大乘教の意に依れば現在も未來も此界も淨土も悉く共に大みおやなるあみだ如來の大心海中にてあり。されば經には如來是法界身、入一切衆生心想中と。また善導大師は、彌陀身心遍法界、映現衆生心想中と讚しなされたるは、宇宙法界一切の所として如來の御身と心との遍滿せざる所はないので、全く如來の大悲心光中に在りながら、衆生自ら知らずして、自分の業報によりて、只娑婆人間界と計り見て居るのである。恰も立派な人の住居の中に在

りて、蠅は只蠅だけに見て居るようなものである。若し心眼開きて見れば此所もまた如來清淨莊嚴の淨土である。されば觀經には、あみだ佛去此不遠と説き玉ひし。

されば寐ても寤めても只一らみだの名號を稱へ常に大みおやの大光明中なることを忘れず、如來の應身現に此所に在ますことを念じ、一切の所作は皆如來より命ぜられたる事なることを思ひ、

同じく如來の大心界中なれども現在私共が生活して居る方は粗末な方にて、働く所である。たとへば農家にて働く時には粗末な服を身につけてまつ黒になつて働き而して休み遊ぶ時には衣服を着換えて奇麗な所にて遊ぶように、同じ如來の中に在りて、現在は粗末な身と服とに一生懸命働き、而して遊ぶ時は淨土の方にゆきて身も服もきよらかに成りて樂をするのである。然れども農家にて働く時に樂をして居つたならば休む時に奇麗に成りて樂をすることが出来ぬ。實に此身と此世界は一生懸命に働くべき爲に人界に來たのである。

されば大經に、汝等このしやばに於て、廣く徳の本を植え恩を布き、乃至徳を爲し善を立て正心正意齋戒清淨なること一日一夜すれば、極樂に在りて、善を爲すこと百歳するよりは

勝れたりと。かように、此世界は一心につとむる所であるから、何を爲すのも皆正心正意の佛道修行でないものはない。また他人から讒謗されても還つて私をきたえて下さる如来さまの賜物と信じて勇みて進むべきである。それを知らぬと只悪く取つて自らの心を惱まし身をいため他人を恨み自心をかこちなどして自らの心までもねぢくれて来る。それを還つて如来さまから黒鐵をきたえて名劍として下さるのであると思へば、

うたばうてたゝかばたゝけくろがねも

つるぎとはなる忍びとふせば

人間一日の命も皆如来よりの賜物と信する時は、いかなる場合とても、自らくぢけたり、それから自殺するなどゝ云ふことはできぬ。いかなることをも悦びすゝみて淨土の業とせねばならぬ。

次に二郎君にはいかゞでした。此程の停車場にての御別れは悲しう御ざりましたね。それでも次郎君これから秋に成つて、如来さまから、冷しくしてあなたの勉強に都合のよいようにして下さるから一生懸命にすゝみなされ。あなたは可愛いボーサンである。

淨念さん、御ひまの折には佛さまを御うつしなされ。何でも此世はむだに日を暮す事ほど愚かはないのです。

それから皆様どうか御稱名稱へながら如來さまに仕え申上る心で悦び毎日の事をなさるうに。

これから院内の人々に講話を始めますから此にて筆をとめ候。

九三

によらいさまは　じひのをやさまであるから、よるもひるも　いつでも　かわゆいのである　わたくしらを　をまもりなされてござる。このによらいさまの　じひのおすがたを　ころに　わすれぬように　をもいなされよ。

ぜんどうさまは　をしへてくださった。

によらいさまは　うるわしいをすがたにて、光みやうかくやくとして、つねにわれをたらしみとうして　ござるとをもふて　をれと。くうちうにござつて　われをみとうしてくださると、またもくぜんにいますと　をもへとをしへられた。

がんそ大しは いつでもくうちうに によらいさまを をがんでをられしことを をかく
れのときに をふせられた。

くわんのんさまのをつむりに によらいさまのをすがたのござるのは、くわんのんさまの
ころに いつでも によらいさまをわすれずにおもふて をるころを かたちにはあらは
したのである。

さきごさん、あなたも このをすがたを をがみて、いつでも くうちうに ござるよう
に おもふてをると、いつでも をやさまのじひのおすがたを わすれぬように なりま
す。

本どうに ほんぞんさまを あんちしてをくのは、人のころにも、いきた によらいさ
まを わすれぬように、ころにあんちしてをけと いふことを をしゆるための ほんぞ
んさまで ござる。

ゑしんそうづわ

ぬればゆめ さむればうつつ つかのまも わすれがたきは みだのをもかけ。

とくほん上人は

おにもでよ じやもでよ でよと せめだして すましてをけよ あみだほとけを。
とよみなされた。

二郎さんに よくによらいさまを わすれぬように つたえて下され。

ほうじやうさまに よろしく ねがいます。このごろは よくおねむりに なされますか。おぐわいは いかゞであります。あなたのしんこうを ますます すゝめて そうして きました くわんのんさまに してやりたいとをもいます。

九四

によらいさまの をじひにみたされたる さきこさん。あなたの つよいつよいしん
で、によらいさまを をしたいなさるのは、ほんとうに ふかいのです。あなたが ねても
さめても をやさまを をしたい申すのわ、をやさまも やはりあなたを ふかくあいして

くだされます。

しうきやうしんの ふかいかたわ ほとけさまを ねてもさめても わすれられぬほど
こいしいのです。それでも、をがむことが できぬと、ころが くるうほど こいしくな
るのです。ほとけさまを ふかくをしたい申す、むねに つもり つもりてくると、たとえ
ば、いどから がすが ふきでるのが たくさんつもりでも、ひをつければよいが、ひをつ
けぬと がいをするを をなぢく、ほとけさまを をもいの がすが、むねに一ばいになる
と、こうみようのひが つかぬあいだは、ちつに くるしむのです。あなたの むねのうち
に こもりつもりて くるしいのはどうじやうに たえませぬ。どこまでも あなたの こ
ころが をひかりで あかるくなりて、やすく ひぐらし できるように、してあげたいの
です。

あなたの つよいつよいしんに をひかりが つけば、てんりきようの をみきさまの
ような、ふかい しんぢんしやとなるのです。あなたの そのしんに 十ぶんに をひ
かりの ひがついたならば、たくさんの ひとにも、しんこうを わけるように、なるので

す。ますます たのしいです。くるしみの つよいほど、をひかりが えますれば ありがたいのも ふかくかんずるのです。あなたわ 一しんが つよいだけ、をもちのがすが むねにこもると、くるしいのです。さきこさん、あなたの だいちのいのちを たいせつに したされ。このごろわ をぐわいいかゞであります。

あなたが、それほどに をやさまを をしたい申して、それがために くるしんでをるところをば、いちにちも はやく、をやさまの をぢひを もつて、くるしみのなかから すくいあげたいと をもいます。あなたの をやさまをもちの がすが ををいだけ、ひがつかぬうちは くるしみが ふかいのです。そのかわり ひがつかますれば、りつばなしんこうとなるのです。

びようきになんどう なつてわ いけません。これから いった かのんさまと なつて 一しんに をやさまに をつかえ申して はたらく みになるのです。あなたわ一しん つよいだけに をひかりが ないと、いのちを ちぢめ みを くるしめるのです。あなたわ どころまでも をひかりを うけないと あぶないのであります。

それほどに をやさまを をしたい申す ころを、どこまでも をたすけ申しますか
ら、けつして いのちを ちぢめたり、ころを くるしめることは やめなされ。

ををやさまから たまわりの いのちを たいせつに しなければ いけません。しぬ
ほど一しんに ならば どんなことでも とげぬことわ ありません。

よく、ほうぢようさまにも をたすけを ねがうて、ますます、いきた かのんさまと
なるまで、をすゝみなされ。あなたの ころは、をやさまの をひかりが いたゞけぬ
と、ほんとうに あぶないのです。そのかわり、をひかりが つけば、それこそは かの
んさまと なるのです。

いきた かのんさまに なることを わすれて、たゞ くるしんで をつては、いけま
せん。

ほんとうに あなたの からだを だいぢにしなされ。わたくしは あなたを どこまで
も ちからを そえて あげます。

また のちのたよりに 申しあげます。

なむあみだぶつ　なむあみだぶつ

九五

そのうちには　さいたまけんかを　まわり、十六日に　すぐでんぼうがきて、よこはまえきて　いまに　こゝにをり、あす　はつねちよう　へゆきます。こんにちをでがみ　みました。

すべてを　大おやさまに　をまかせ申しあげて、あなたの　おぼしめしに　かなうように　をねがい申し候え。

人げんかいに　だしていたときで、こんどの一大じを　とりそこねては、また　三あくどろの　やみのなかに　をちては、いつまた、大おやさまの　をじひに　あつかることか、とても　ふたゝび　じひの　みひかりに　あふことができぬ。いかなることも　大をやさまに　をすがり申して、こらえるように　なされ候え。

いまは、わがにほんの　人々が、大おやさまの　ごをんと　をぼしめしをしらずして、を

やさまの かうみようを しらすして、みなやみのなかに をちてしまうから、一しようけんめい になりて、大おやさまの をぼしめしを よのひとくに しらせなくてはならぬ。いのちにかけて つくさなくてはならぬことがあるでは ありませぬか。

こいしいの なつかしいの なんて いふてをるときではありませぬ。

大おやさまの をしかりの こえを きいてめをさましなされ。

ほうじようさまえ よろしくねがいます。かうのより、でがみで、わたくしに、あなたよ
りをくり下された ことを、申してきました。

ぎりにくるしむ、それは じつに どうじようにたえぬ。大おやさまに 一心に うかぶ
うて、おやさまの おぼしめしに まかせなされ。

それにしても、一しんに 大おやさまに おたのみなされ。おやさやの おぼしめしに
もとづかず、じぶんかつてにしては なりませぬ。

九六

しもうさの てらをしまいで、しよしまわりて、すぐに しづをかにでゝきまして、すこしのひまもないので、をへんじが のびのびになりて なんとも もうしわけ これなく候。

うけたまはれば、また たいそう ごしんばいなことが できましたので、わたくしも しんばいしてをります。

によらいさまを をたよりにして、どんなことができても、ますますによらいさまを ちからにしてをれば、ついには やすらかな みちがついてきます。もしどふしても しんばいが しきれぬければ、ほうじようさまに よくをはなしをして、そうして こちらえくることにすれば、によらいさまから よいみちがつけて くだされます。

いつれにしても、によらいさまを たよりにして、そうして じぶんのつとむることに 大じをとつて つとめてをれば、よいように なりてくるから、をゝきい ころに なり

てをりなされ。

人げんの一生は 大じであるから、一にちでも むだな ひぐらしをせぬように、をねん
ぶつを申して、によらいさまの をじひの ふところすまいであることを わすれぬように
しなされ。どうしても わるくせられて、たえきれないければ、こちらえくれば みちはに
よらいさまが つけて下さるから、しんばいなされますな。それにしても、ほうじようさま
の をこゝろに したがつて せぬといけませぬ。

わたくしも らいげつ十ごにちころまでには とうきようえかいます。
大いに をくれました、をへんじまでに。

どうぞ ほうじようさまえ よろしくねがいます。

九七

によらいさまの じひのふところのなかに いかどに候や。

このごろから、たかさきより ほかをまわりて とうきやうえ かえりました。

あなたのをからたが このごろは いかどであるか、ふかくあんじて をるけれども、ひろくまわりてをつて をたづねができたのでした。

あなたのことよいつよい 一しんをもつて、をやさまの こうみようを 十ぶんに えたなれば、ほんとうに りつばな しんこうができます。あなたが をやさまをしたいなされて、ところをなやめてござる。あなたは一しんがつよいだけに をこうめうをえないと、ころをなやめることも ふかいのです。わたくしは あなたのからだを わるくしてはならぬ また きをくるはしては ならぬと、あんじています。をやさまをしたふても、こうめうをえられぬために、もしも からだをわるくするか またねむられないで ころをくるしむようなことなれば、じつさいに とりかえしのつかぬようなことになつてはいけませんから、しばらくしんこうのあんじんがつくまで、こちらえをいでなされ。ここにはしんこうの ころのしゆぎやうするひとが、あつまつてをるので、わたくしに しばらくとどまつてくれとのこと、をるのであります。

あなたのことろに しんに しんこうがえられますれば、一しやうのとくであります。

をてらでも、あなたがをらぬと　こまるでしやうから、こちらまでこなくても　をさまる
ことなれば、これから、よるまいばん　一しやうけんめいに　をねんぶつを申して　しんじ
つ　しんこうの　できるように　つとめなされ。

しんに　しんこうができれば、このみながらに　ころだけは　ごくらくになれます。に
よらいさまと　はなれぬようになります。

このころのようすわ　いかゞですか。をたづねまでに　申しんじます。

なむあみだぶつ。

九八

先月廿五日御差出しの御書簡只今拜見候。承はればサキ子サンには心配の結果御病氣に相
成候由何とも同情に耐へず候。實は愚納先月廿一日出立静岡市を始め其縣下を本月初旬迄巡
教し續きて横濱に滞在し次に千葉縣に罷越し十一日より今日迄巡教し只今當處に着し候て御
書簡に接し大に驚きし様な事にて候。昨今云何々被爲在候哉。

精神治療の事につきては東京に大家も居り候様に聞及候。愚衲の知人にも婦人にて是は醫師の妻なれ共信仰家にて候。若し御寺の都合も出来て御同行被成候はゞ尙又好都合にて候。而して愚衲知己の婦人醫師妻なれば、信仰深き方である故、其術をゆるして呉ると存候。また角田眞平と云方は河野夫人の知己なので、而して其夫人が新發田の家老の娘であるとの事。

兎まれ御都合出来候はゞ御出被成一日もはやく全快の運にいたしたく候。實に夢幻の世の中に、種々さまざまの人事、同じ月日を暮すについて、すべては因縁に任して、而して如來大悲の光明の中に日ぐらしせんことのみ希候。

もはや御地方では、ソロ／＼雪も降初しことならむと存候。

何れ御面晤に萬々可申上候、先は延引なから貴答かた／＼如斯御座候 和南

九九

その／＼ちは しょ／＼まわりて 大にごぶさたいたし申わけこれなく候。その／＼ち おか

らだのはうは いかゞに候や。せいしん ちれうを こゝろみては いかゞのこと、とう
きやうに、せんせいがあるから、御いでできれば そのごつごうになされ候よう。

また なにか たゞしんばいごと、たくさんあること ふかくをさつし申候。

ほうじやうさまも 御いでくださるとのこと いづれ おめにかゝりて よくをはなしいた
しませう。

とかく しやばは くがいのことなれば、そのあとく〜と さまぐ〜のことが わきだし
てくるから、それにつけても たゞく 大おやさまを たより申ほかに みちはないと存
候。もはやことしも わつかになりてきました。おんちでは もうゆきが ふりはじめたの
でせう。大みおやの 大ひの いとあたゝかな ふところのなかに、こうめうのひぐらし
なさるゝように ねがはしく候。

もし御いでできれば、とくとおはなし申ます。

如來大慈光明裡に輕安に被爲在候條大慶此事に候。

却說昨日八時過に御内室さき子様御無事に着きなされ、御持參の御書簡を拜見し委細承知仕候。當徳厚會館を御存しか云何。河野廣仲君の内室せき子氏の發起にて、數多の貴婦人に組織せられたる者、河野せき子夫人も常在當館に罷り在り、また他に長澤てふ婦人も話合し事なれば、其二人に頼み置候へば、他に泊宿所を求むる要もなき事にて、皆何れも信仰の修養を首として居候仲間なれば、別に氣遣ふ事も無之候へば、仲間通しにて相互に信仰も養ふべく、且つ愚衲も朝夕禮拜の前後には信仰談を致し候。

右様な事なれば、御案じなく、御當人の安心決定出來る迄は、御預り置候間御安心被下度候。

右兩婦人と共に、また増上寺其他へも參詣いたす事も出來候間、左様御承知被下度候。

當館に泊宿する事故に、蔬菜料位まかなひ方に出す事に致事なれば、費用とてわつかにて

すみ候故、當方にて宜敷く計ふべき故、是また御承知被下度候。

愚衲も當分暫らく他出も致し候へども、當館に歸り來り候事なれば、すべての事は宜敷いたし候。

尙種々申述事候へども取急き要用如斯御座候 勿々頓首

一〇一

天地萬物山河大地一切の動植物に至るまでも、悉く皆法身如來藏の顯現ならざるはなしてふ佛陀の教に本づきて觀じ來れば、野に山に綠と現はれ黃と化する千變萬化の現象界、皆隨緣眞如のすがたにて妙また妙ならざるはなし。殊にくありがたきは、

宇宙萬有中最上無比の現はれなる

無量光如來は衆生大慈悲のミオヤとして光明遍ねく十方法界を照し、殊に念佛の衆生を光明のなかに攝取して、子をおもふ親の慈悲のしからしむる處、ついに信仰の靈を養ふて、親子の對面できるようにして下さる大ミオヤの慈悲よりかたじけなきはなく感しられ候。

さて其後は御無音仕り候。今回愚納も當徳厚會に來り候。翌々日より、上野寛永寺に於て眞言の管長權田僧正が眞言金胎曼荼羅の講傳會が開かれ、二週間にして一昨日結了し、幸にそれを受けることにして日々に通ひ候ひし、彼是して大に御無沙汰候ひし。

御内室サキ子様にも、河野長澤兩人らと共に或は道場に參詣し、また當所にて共々信仰を養ふことにいたし居候。御同人には別にかはりしこともなく、

如來大悲を悦び居るように存候。

此程御書中の、岩井長平君には昨日御訪ねに相成候。宗教上の話しなどもいたし候。

サキ子様には今暫らく滯留して信念の養をいたすことに、河野夫人よりすゝめられて、其つもりにて候。

尙費用の事につきては、當所は安居生活、何にも金をかけることも無之候へば、其事に就ては決して御案し無之様に被下度候。

何れ御歸郷きまり候へば、重ねて御一報仕るべく候。先は近況如此御座候 和南。

此世界を、楽しく観るも苦しく見るも、皆人々の心丈に觀じて居るものとおもはる。印度の有名なタゴールはかく云て居る。此世界萬物は悉く神の善から顯はれたものであるから、すべての物を能く心を用ひて見れば、悉く喜を呈して居らぬ物はないと。吾人は宇宙萬物は悉く如來の清淨 歡喜 智慧 不斷の 光力を被むりて居らぬ物はないとおもはる。先づ朝起て太陽の東の天から昇る空を詠めても實に清らけく新たに鮮な事よ。本とうに清淨光が萬物に充て居ればこそ、かくはきよらけく現はれる物よ。而して天道様の御面には滿面の歡をたゝえて居らつしやる。而して世が一面に明るくなると只今見えなかつた山河大地一切が明らかに見ゆるは智慧の現はれとおもはる。また太陽の赫々たる御勢ひは不斷に活動なさるゝを見ても、どうしても 清淨等の光明の現はれとより外は見へぬ。

地上にある萬物一として其が現はれとおもはる。雨のふるのも空氣を清らかにする爲に雨がふりしきつて面白そうに雨は降つて居る。而して降ては流れまた蒸氣と成りて空に昇りな

どして、不斷の働が休むことがない。

我々のからだでも、よく知らぬ人は、垢が出てきたないと申けれども、そうではない。からだの働きは、毎日食た物で後を補つて新陳代謝して不斷に新たに清く潔よくして居る。新しく清くする目的の爲に、一方に除去の方を見て、垢をきたないと云ふので、其垢とても、ついには清められて、草木などの、新しい清き物にかはりて出て来る。からだの中の血のめぐる處、またすべてはいつでも喜をたゞへて居る。かようなわけでありますから、私共の心も、成べく大御親の光を我心として、常に清らかに、快よく潔よく、歡喜に充され、不斷に活動して、おやさまの御意を意として、生活いたし度存候。

此程御書簡拜見仕候。サキ子様には、廿九日御出立被成御無事に歸着被成候由尙經過も宜敷との御事歡喜此事に候。

そのうちには ござさたいたして すみませぬ。このころは をからだは いかゞでありま
すか。をだいに なされませ。はやく をたつしやになつて、大をやさまの おぼしめし
を よの人びとに ひろめるようにして ほしく候。よはむじやうにて 時のうつりゆくこ
とは すこしも とどまつておらぬから、どうか 大をやさまの をじひを 一人なりとも
おゝくのひとに をよほしてくだされ。

六どのなかに 人げんに生るゝことは よういでない。たとひ人げんにうまれても おつ
ぼうに あふことも なか／＼かたいことであると をきやうにといてある。また おつぼ
うにあふてもいくらきゝても、大おやさまを ほんとうに おやさまとおもふて、おやこの
なのりあいができて、をじひのふところすまいとなり、またをじひのちぶさに あさな夕
なに はぐまれて、いつでも おやさまと はなれぬなかと なるといふことは よほと
(よりかは) しゆくえんが ふかくなければ えられぬことですよ。

またしゆくゑんの　とういひとくは　あみだによらいと　申あげるをかたは　とういと
うい　西のあなたに　ましくくて、しんでゆかなければ、御じひを　かふむることは　でき
ぬと　おもふてをるひともある。

ぜんどう大しは、によらいさまと、ねんぶつしやとの　あいだには、しんえん、ごんえ
ん、ぞうじようえん、と申して、三つの　ふかいく　ちかいく　したしいく　つよい
く　をいんねんがありて、きつてもきれぬ　はなれたくもはなれることのできぬ　あいだ
がらであると、おふせられてある。ほんとうに　いつでもく　大おやさまの　あたゝかな
御じひをはなれて、どうして　わたくしどもの　しんこうのいのちが　つなぐことができ
ませう。

なくこゑに　はゝのちゝは　くちのなかに　うけながら、それとも　わからぬのは　この
あいだ　うまれたばかりの　あかんぼうである。

大おやさまの　じひのちゝを　いたゞきながら、それともしらず、みふところのなかにい
ながら、さとも　おもはずしておるのは、わたくしどもである。

あさばんに、むりやうじゆによらいの、をこうめうのとくを　さんだんして、あなたの
光めうのなかに、このよながら、おやこの　なのりあいが　できるばかりでなく、ますく
をじひにはぐまれて　しんこうしんが　おゝきくなりて、じぶんばかりでなく、よの　す
べてのきやうだいしうに、おやさまをしらせ、まつたく　きやうだいの　しんじつが　あら
はれてくるように、どうかして下され。

ほうじようさまにも　よろしく申あげて下されませ。

それから　をからだの　ごようすは　いかゞでありますか。またをんせんは　いかゞなされ
ますか　きかして下されませ。

五月の末か六月はじめには　御地にゆくことゝ存じます。まつはをへんじまでに。

一〇四

實に本春來の御修繕につきては容易ならざる大事業御熱誠の加はるべき所に

佛天の力は加はり、事ごとくに至り候ことを思惟すればまことに有難き事に候。

御堂の清く改ると共に檀信家の信仰心のいよ新たに於て又新たならんことをねがはしく候

惠心僧都の詠に

法の身の月は我身を照せども無明の雲の見せぬなりけり

如來の皎々たる満月は永しへに照しませども信心の窓が開けぬほどは見へぬなり。

法然上人の

阿彌陀佛と申すばかりをつとめて淨土の莊嚴見るぞうれしき

如來はいつも此所にましますけれども一心不亂に念佛三昧修して心がひらげざれば光明に觸れることは出来ぬ。けれども太陽は見えねども信心の夜が明けてみ光のなかに明し暮し居る人は、同じ光明生活、實に有り難く存じ候。

量り無き壽の御名をたゞえては

先つあらたまの年をことほぐ

舊冬御別れ申してより途中大に暇取れ漸廿六日に歸京候。

例によつていつも御無音の段多謝候。

外は寒風肌を裂くにも、こゝろは彌陀の暖かなる慈悲の懷に在り、日々雪の空あいにてくもり勝ちなれども、こゝろはいつもはれ互る彌陀の光明中にあらまほしく候。

西行法師の、世を捨てゝ身はなきものとおもへども雪のふる日は寒くこそあれ、かの西行法師は世を捨てゝ身をなきものとおもふてといふ。我らは

彌陀にお任せ申してからは我身ではなく、アナタのものである。また世を捨てたのではなく、彌陀の光明の中の世にて、我らは彌陀の給物なる我が身、寒きもあつきも、あなたのよろしきに、あなたの御はからひにて此世にある身。

此土の一日一夜は淨土に於て百歳するよりは勝れたりとの事なれば寒きもあつきも中々容易ならぬ時間なれば、成るべくむだにせぬ様にして、而して有縁の人々に如來の光明を讚美して共に唱へ共に歌ひ共に讚美し共に法味を味ひ共に悦び共につとめ一生懸命につとめ行ふべきを行○して居れば、作す業の方に心がいから、寒さあつさを感じるいとまなく候。而してつとめらるゝだけつとめて、つかれてくればまた快く眠られることにて候。

自分の事をおもふといろ／＼の苦も惱も胸の隅の方よりいくらも／＼湧出して來るから、たゞ／＼如來さまの方のみおもふて、我を忘れて念佛し讚詠して居れば、知らず知らず、佛と共に、はなれぬように相成候。佛と共に居る心が即ち一分の極樂にて候。

何はともあれ、たゞ／＼佛と共に在らんことをこそねがはしけれ。

あみだ佛に染むる心の色に出でば秋の梢のたぐひならまし、との宗祖の御道詠をおもはざるをえぬ秋の頃ほひ、しぐれにあふ毎に野に山に黄に紅にますく濃厚を爲すを見るにつけても私共が

大みおやの大慈光のなかに、染まぬこゝろの愚かさをいかにも慚愧に耐ざること候。

其後は打絶て御無音にのみ過し心には常にかゝりつゝあれども、なか／＼に忙しさについにおこたり候。

皆様大慈光裡にますく御すゝみなされ居ることならんと存じ候。

(中略)

大みおやの慈悲の乳に育まれて、

宇宙間にまたとなき

おやさまの麗しき御（かほ）に接して親しく親子對面の出來うる同胞の得まほしきよ。

みおやのみむねはしばしも子にかゝらぬ時はなかりしも、子らがこゝろの頑是なさ、只目の前の徒ら事にいそしみて、みおやをおもふことの薄きはまことにおもへば恥し。

世に親を離れたる子ほど憐なるはなし。全く親いまさぬことなれば是非もなし。

みおやは子等をおもふ切なる、しばしも休らふいとまなきに、そのみむねを御惱まし申ことの勿體なさよ。

大みおやのみむねを御やすめ奉らんが爲に、常にみむねにあることを表して聖名を稱えんことをこそ。

一〇七

時下新緑ますくみどりの色の添へるを見るにつけても、法身の大みおやが萬物をめぐみ給ふ御いつくしみをおもはざるを得ず候。

報身の慈悲の光明も、私どもの心をいつくしみ給ふこと、尙々深きことなれば、私ども、

草木のように直正なこゝろにて、大みおやのまに／＼念してだに居りしなれば、信念のみどりも、ます／＼色まさりゆくべき筈なるに、凡夫の心の淺ましさ、

大みおやの聖旨のまに／＼こゝろを用いず、自らのほしいままなる念にて日を送り夜を明し、太陽の常に照せる如くに、

大みおやの光明は私共の心を照して、此頃の氣候のそれよりもいやまして、私共に對して、はぐくみの力を與へたまふなるも、我まゝものゝ常として、無始以來の習慣に捕はれて、高い／＼清きに／＼向上せしめ給ふあなたの聖旨に隨ふことの出來ぬ愚さをおもふにつけて、頼むべきは大みおやの御慈悲にすがることにて候。

光陰過易し。もはや今年も半は經にけらし。おもへば實にも頼み無の世にて候。さあれ、大みおやの無限のかぎりなき生命を我らに與へ給ふ。我らはかぎりなきいのちを我命として下さる大みおやの御子であるとおもへば、有難くぞ感じられん。

御書に依りて承れば益々御輕安に被爲在候由またサキサンには此頃はいよ／＼御快方に被爲成て畑の仕事にも御出なさるとの事いかばかり悦ばしきことに存候。

此程御書頂戴いたして直に御返書差上べき筈の所實は京都よりの御通知を待ちて大に延引に相成候。愚納本月は御地に罷出引續き御地方巡教致すべき豫定の所、本月七日より神奈川縣教區の講習會五日間、引續きて十五日より京都高等講習會に出講すべき様宗務所より被命是で七月一杯、引續き伊勢美濃にまたがりて結縁、廿五日より三重縣教區講習會八月に歸京して或は直に越後國に出べきや今日長岡法藏寺様よりの通知によれば若秋期に越後に來るならば彼岸前後が然るべきとの事、かような譯にて夏期秋期に凡そ二三ヶ月延期に成り候事まことにおもふようにならぬ世の習ひ、

兎まれ角まれ、みな悉く大みおやの聖旨の然らしむる所とおもへば、たゞく有がたくおもふて、稱名して、何事もいさましく果すことにこゝろ掛け候。

此程郵券澤山頂戴いたし有がたく御禮申上候。先は當要如斯御座候和南

おてがみかたじけなく候。

うけたまはれば、ごいんきよさま、ついに御せんげなされたとのこと。じつにむじやうの風は、いつ何時たれのみの方へにふきまくるかわかりませぬ。せんじつは、よほどさくねんとはかわりてはおるものゝ、それでも かへりに あふことのできぬ みの上になるとはおもはざりし。

ろうしよう ふじよう なれば、いつのあらしに、わが身ふきゝゆるかとおもへば、いのちのとぼし火も たのみなきものにて候。

さればこそ、ねてもさめても、はなれてならぬのは、大みおやのおじひのみにて候。

あなたも、申までもこれなく候へども、

大みおやのじひのふところにある身、つねにじひのちぶさをふくめらるゝ稱名をはなれぬよろになされたまへ。

一〇九

あさひののぼるすがたにも、また、そらをとびゆく雲のなかにも、大みおやの ふかしぎ

の御はたらきのほどを かんぜられ候。何はともかくも

大みおやの御めぐみが つねに この身にふりかゝりあることを 有がたくおもふては よろこび、たとひ、このよのいのちは かぎりありても

大みおやより いたゞきたる いのちの かぎりなきよろこび ねてもさめても みおやの ありがたきことをおもふては しようみようし、たゞく

大みおやとはなれぬように念佛いたして、日を暮し夜をあかすことがありがたくぞんじ候。

一〇

只今淨土全書十九546 増上寺觀智國師の語に、

「又淨土宗は八萬諸聖教皆是阿彌陀と見奉る。他力實體之法門に至つては、色心實相にして森羅萬象山河大地彌陀にあらずと云事なし」

天地萬物皆法身彌陀の現象として見れば、野に山に紅葉に染まる梢も何かは彌陀のみちからに感化せざるやある。されば宗祖の、

あみだ佛に染むることろの色に出でば 秋の梢のたぐひならまし、との道詠におもひ合すれば、野山の紅葉は法身の恵みに染まり、宗祖の御道心は報身慈悲に薰染して、げにも紅に麗はしきを呈し美しきを現はせる御すがた、眼にも見えるやうな、いかに麗はしからん。野山の木の葉のそのの如くに、何人か一心に念佛して如來の慈光を被むるあらば、よりはく清らかに麗はしくうれしくも樂しくも法悦と三昧樂との妙味は感ぜざらめや。おもへばありがたや。

御玉章に接し御地の模様を承はりうれしく存候。山崎垣内由布家のいとも清き優婆夷の四たりの君の御發起にて、きよき集いの御仲間御成立したとの事をうけたまはり上なく悦ばしきにぞ。是ぞ大悲のおや様の御はからひと存じ深く感謝し奉つる。大悲のみおやは永瀬上人の身を通して、斯くは御はからはせ玉ふものと存じ有がたく感じられ候。就て會名をとの仰せ、我々は一度 大みおやの御許を離れ、久しく六塵のちまたにさまよひ、生々世々にあらゆる塵と埃に汚され、實に己ながらもかへりみれば恥かしき心のすがたとはなりぬ。それを憐れみ玉ふみおやの恩寵、無始已來の染汚をそよぎて、きよき聖意の子らとして靈育し玉ふ

思召を、經に、其れ衆生ありて此光に遇ふ者は三垢消滅し身意柔軟に歡喜踊躍して善心生せん。の聖意より、心光常に我等を攝化し玉ふ。我等は日々に娑婆の塵埃中に在るほどは、殊に如來の心光に清められざればならぬ身。日々に塵埃にまみれるが故に、清めを仰がねばならぬ友なれば、それを常に忘れぬ爲に、清き友と云ふ名を以て結ばれ玉はんことを願候。

如來は靈光を以て清め玉ふみおや、我等は稱名を稱へて清めらるゝ子たる其會まりが即ち友にて候。此友のなかには、とうのむかしから入會なされて在られし觀音勢至の兩ぼさつの御名を忘れぬ様ねがはしく候。

そは觀勢兩ぼさつの名を稱へて念ぜよと云のではなく、若念佛する人は人中の白蓮華、兩ぼさつも常に勝友と成つて愛護して玉はるの意味にて候。されば友の衆は生れた計りのまだ赤子の觀音さまなので、觀音の頭に常に阿彌陀如來がましまして離るゝことなき如くに我が愛敬する所の友の衆の御こゝろに、いつもく大みおやの如來をはなれぬ様に、一にきよき名を稱へて念じ玉はんことをねがはしく候。

尙くさく申速度事有之候へどもまたの便に譲り候和南。

尙きよき友の發起たる四菩薩衆をはじめ、すべての御友のかたぐゝに宜敷御傳への程を希候。本山は先月三日に辭して關西地方を巡教し、本月一日より十日まで當教區普通講習會に出講候。講題は彌陀教義 十二光の講説に候。

一一一

未の年を迎へて（註―はがきに）

きよらけき光の御名をたゞへては

まづ新玉のとしを祝ひつ

みおやの賜はる時の貴とさをしらざれば

またもなき賜ものてふの時と日を

たゞいたづらに過ぎまじものよ

一一三

欽啓過般佐屋阿彌陀寺に御参り被成其折は甚だ失禮仕候。且つ珍菓の御惠贈に預り多謝候。

宇宙は實に無量光にして空間に遍ねく、無量壽にして時間に徹せる不可思議なる大靈的光明の存在を信じ、此中心の眞髓と成るものと親密なる關係する所に我らが永遠の生命は復活することにて候。我らは靈の光明に自覺し大生命によりて活けるものに候。願くは世のきよき同胞衆と共に永遠の生命を得んことを祈候。

一一三

家康が武運を開發せしめたるの原動力は大樹寺の後にありと云ふことは康公自ら信じて疑はざる。終身其恩を忘れざるが如し。

康公が運命を回復せしめたるは廿二日の戦争にあらずして、廿日の夜登公の座下に参じ

て、登公が勸化の言下に大死一番祖先傳來の時代思潮に〇たる奸盜武士の心機一轉して普遍的安寧を以て萬民と福利を共にせんとの菩薩の意志に復活したるにあり。

匹夫奸盜死して安國の菩薩示現せり。公が此身を現世の物と思へば意志退轉の恐ありと、極樂の聖衆と成て人類の爲に活動せんと轉換したる意志を形式に現したるに過ぎず。(註—登公—登譽上人)

一一四

如來の大なるみめぐみを感謝し奉る。

みむねによりて活ける聖なる同胞の幸福をいのり奉る。このごろいかにおひぐらしなされまするや。

聖なるみおやはかぎりなき愛をもととしえにまもり玉ふことをわすれませぬか。

その後しばらく御目もじをえすうちすごしおり候へども、さだめて御惠みのなかにますます聖きころのいやましぬることならんとはるかに存じあげ候。

教主世尊即ちしやか如來はみこゝろがとこしへに靈くましますれば、おもひ内にあれば自づから面にあらはれていつもうるはしき相にましますし如く、しやかむに佛の御こゝろに高きあみだ如來の聖靈つねにましますばなり。

そのごとくに、しやかむに佛を御手本として、いかなるばあいにも麗しき色をかえざるようになりましたでせうか。如來の聖靈がこのこゝろに離るゝ時はむねのうちが淺ましくいやしくなり、よしなきことにこゝろをなやめおもひをわづらはし、又はかなしみまたうか／＼と日を暮らす様になりました、一日一夜八億四千念のおもひはみな三惡道のたねをまくことになります。

それと反對に如來のみむねを蒙り御名をとなへ御慈悲のなかにひぐらしする身は

如來の靈つねに我心のうちにましますれば、たとひ外よりなにごとがあらうがまゝよ、そのなかに心も平和にてあれば、いかなるばあいにもうるはしきいろがかわらぬようになりま

す。
ねがわくばいけるばさつとしてまた世のものはんともなるよふに御修行のほどこれい

候。

いつぞやと同じようにくりかへすかは存じませぬが、天地萬物と共に、この身のいのちもみな法身如來のたまものとして、そのみちからとみめぐみとによりて活けるものとすれば、全躰如來は何の爲にこの身をいかし玉ふのでありませう。また我は何の爲にいきて居るのでありませう。この活ける目的は何の爲でありませう。

如來はみ親にして、われをいかし玉ふ親は、子どもの爲に日々のかてをあたへ着物をもきて子どもに教育をもするのは何の爲でありませう。私の子は落だいしようとも、またいかなるならずものにならうとも日々のかてさへあたえて居ればその他には一向に子どもの爲に目的はありませぬといふような親がありませうか。恐らくなからうとおもふ。親の子に對する要求はどうかよき人にしよき精神をもて立派な人物にもならせたとの心から、日々のかてもまたは年々の衣物も與へて育つるのであるとおもふ。それと同じく如來みおやは私どもに日々のかて年々の衣物も天地の間にできるようにして、私どもなる子どもにべんとうを與え下さるのは、五十年六十年間の人間でふ學校にて、精神のうちに聖なる徳をやしなひて、

私どもをみおやのよつぎたるきよきみくにのぼることのできるようにとの目的によりて、かてをあたへ玉ふのでありませう。人間界は聖なる心をやしなふ學校でありますぞ。この聖なる徳をやしなふにはいかゞして養ひませうとならば、つねに如來の聖きみむねがわがころにあらはれんよふにいのりて、いか成ることができてもそのなかに於てやしなふのであります。よしや他人が我をそしらば、これによりてわが心のみがゝれることゝして心を鍛錬し、すべての苦しみもみな一心をきたゆる爲と存じて修行のすゝみゆくのであります。

如來はいつもこの心をしけんしてましますば、いつもなるべくらくだいせぬように御修養こそ肝心にて候。この世界に出て來たるは遊びに來るにはあらで、修行の爲にであります。しかればいかなる困難なることもこれにうちかつ修行をせばやとて、如來のみめぐみを力としてからは、はじめのほどは修行が未熟にてあればこそ困難に感ずるなれ、ついに熟するときは安く忍ばれるように成ります。人間は形ちの上の幸福は眞の福にはありません。心に於て受くる福こそまことの靈福であります。かたちの幸福は却て道德の爲にやゝもすれば損害をまねきます。

慈悲 歡喜 正義 安忍 謙遜 勤勉

などのすべての徳をもて精神を莊嚴するよふにするのが人間のうつくしいのであります。

永劫に不朽の光となるのであります。それもやはり如來のみめぐみによりてとげらるゝのであります故に

聖きみ名をとなへてみむねのつねにあらはれんようにいのりませよ。

みむねのあらはれをいのるとは

御名をとなへて、あなたの尊き思召がわがこゝろのうちに想はれてくる時は、わがこゝろがきよらかに、やすらかに、ありがたく、とうとく、うれしく、よろこばしく、よく心がひろく、あかるく、うつくしくなるのであります。

如來のおこゝろをわすれて居る時は、淺ましき、自分ながらはづかしいようなこゝろにうづまりて居るのであります。如來の聖旨をわが想にうかぶ時は、雲間よりさやかにてりわたる月の面のあらはれしごとくに、心がはれわたりて來るのであります。きみよ。この日々はきよきみむねによりて、修行のために活つゝあることをわすれ玉ふな。如來さまは御身のか

たちの上の幸福のみをもて御めぐみ下されたのではありませぬよ。あなたのごころのとりよ
うにて不幸も幸福と轉じ來ります。

如來さまより御あつかりましたる御子さんを聖旨にかなふよふに御そだてなされませ。其
が御禮であります。かたちの大切なるはよき精神が宿りて居るからであります。精神は如來
より御あづかり申たのであります。

村のすべての婦人たちは同じく如來より御あづかり申たる子どもたちのたましゐを種々に
そだつるのであります。御子さんを村で道徳上第一の人におそだてなされよ。如來さまえ
おつかえ申上るのが第一であります。

また如來の聖旨をうけたる婦人の模範として夫に仕ふることを希がふ。願くばいけるくわ
ぜをんとしてはたらかれんことをこそそのぞましかれ。

一一五

佛心とは一切平等にして彼我の差別なき心。

煩惱心とは四大假和合の身を我身なりとおもひ、受想行識を我本心なりと思ひ、苦樂を主に
する心を申す。

會て煩惱心と佛心との區別に付御答辨の御書披見候。理論としては御意見の通りにて宜敷
候。已に光明を得たる上は佛心が自己の本領にて煩惱心は本領を忘れたるより起る魔物なれ
ば、此魔の爲に横領せられぬように、常に光明名號を念じ、念々光明現前する時は佛心が常
となり光明の生活を得べし。

清淨なる光明の念是自己の本心歡喜なる光明の心是自己の本領、智慧光明の念是我本心、
不斷光明の念是我本性、此光明の念をはなれて念々煩惱と相應するは未だ如來の大信得され
ばなり。如來の大信は、我心即ち如來心、如來心即ち我大信。
如來心をはなれて我心なきは是大信心なり

古人が、

となふれば佛も我もなかりけりなむあみだ佛の聲ばかりして
本來の我名とすればうれしけれなむあみだ佛の聲きくときは

秋風にすゞしくすだくむしの音もいとあはれに、今年の秋もはや半ばすぎにけらし。實に
惟みれば光陰の過ゆくことはやく、たゞ時光のみ空しくくらしして、道業の運ぶことはいつも
すゞみやらで、日々御わびのなかに日を明し候。

さて日外の是心作佛の案に對し御修養の結果を御しるしに相成候披見仕候。日々に身の行
爲と口の言語と意の思想とに於てみひかりを業の上に現はすことゝのこと、修養日につみ心
行いよ／＼進むときは、たとへば新月一日より○日まで日々に光を増す如く、敢て問ふ君
よ、あなたが始めて如來の眞理を聞なされし時は、如來の光明は是いかなるものなりしかを
未だ曾て經驗せざりしなれば、定めて此眞理のことにつきては晦日の夜の如くにて、我精神
中に月いづれにありやまた無や、有や無やのなかに、これをぞと目ざす處だになかりしこと
に候はん。其頃ほひと今日とを比較する時はいかに、今宵は已に月は何日頃ほどに相成候よ
うに感じられ候や。

さて念佛心と煩惱心とは其比較いか成ものゝように觀じられ候哉此兩念を諦かに觀察して
ますく闇黒をさりて白光に進まれんことを御すめ候。

きよき同胞たる君よ、

涼しき風は秋の氣をもよほし海潮の聲は梵音いと朗らかなる今宵、心を靜めて我は西の空は
るかなるそなたに思をめぐらして觀すれば、我理想中に浮べるいける觀世音ぼさつは、百福
の莊嚴おごそかにかゞやくごとくにして、其ぼさつの心の中には、眞如の月さやかにして彌
陀の光明永しなへに照しつゝあるように想はれて候。其光に充されつゝある胸のうちには、
五塵六欲のけがれもなく煩惱のほのほはかげだにもなきように觀じられて候得ども、現實な
る君にはいかゞ在らせ玉ふ哉。全くこなたの理想に浮ばるゝようにおはせしや。みな人の理
想に觀じらるゝごとくには、現實の血のめぐりつゝある間は行くべき筈はなかるべしとは存
じ候へども、それでも我理想にしのばるゝいけるぼさつは、血や肉までも如來のじひにみた
さるゝようにおもはれて候。さて女ぼさつよ、ぼさつは血と肉を以て其中に如來の心光照わ
たるなり。

煩惱心と如來心と併存するなり。煩惱心如來心より深きは下地のぼさつなり。

如來心煩惱心よりつよきは上地の丈夫なり。

日々にこの兩方の心を比べ觀じて、ます／＼如來光明心が其觀念中に多くならんことを希ふ。尙其心光を身の行爲に現はさんことを望む。

秋九月八日の夜清き同胞へ。

一一七

量りなき光りはかつて照らせしもしらで久しく年を經にけり

さて眞理の源なる法身無量光の本覺眞如の光明は無始より已來本然として永しへに普く十方法界を照らして到らぬ限もなかりしを、我ら衆生本覺の日輪の中に在りながら、無明に戸ざれ、うば玉のくらき闇夜に生死の夢をむさぼりて、五塵六欲貪瞋煩惱を以て全く我とおもひたりき。迷の我をもつて實の我とおもひ、本來我性を知らず我心は唯煩惱のやど、また三寸の胸中是全く我と執し、有や無やのなかに葬られ、本覺の我本來の自性は未だ曾て夢にだ

も見しことなかりき。

本覺のみおや無量光の分身たる我なれば、我心靈の光本より法界に照しわたるとはまぼろしにだも見たることなかりき。無量光の此一分たる我心靈にしあれば、我心靈を開發し來りて觀ずるときは、我心宇宙に周遍しぬれども、我心靈の本源たる大みおやを知らざるほどは、一切衆生悉く心靈は同一の本源にして、皆同胞の眞理を覺らざるからは、いかにして同胞と名乗ることを得べきぞ。

聖き同胞なるきみよ、あなたがたが御召なされし衣の中の寶珠を開き見しに燦然と光り輝くを發見したるときのおれしさよ。はじめて同胞と名乗ることを得たる我よろこばしさよ。本來の心をさとり來りて初めて本覺の父に拜顔せしことの目出たさよ。

あなたの心の光りは普ねくいづこにも照らさぬ處もなきなれば、照しわたるあなたの心はたとひ千重の雲百重の山をへだつとも何かは礙ざるものがある。

またも世にいふ言葉はなかるらむ無量光壽の御名の外には

如來無量壽の中に安住する身には去るも來るもなく常住安穩の安心には候へども、しばらく此四大の身はかりのやどり、月日めぐりめぐりて明ぬる年をば四十四年とはなりにけらし。同じく如來の光明のなかに、さらに改まりしこのよろこばしさ、めでたく御祝申上候。今年は亥とし、猪てふものは只すゝむことをしりて退くことを知らずと聞ならく。されば我佛道に志すものゝ爲にはよき年にて候。即ち梵語アビバツチ、こちらに不退轉といふ。不退轉に位不退と行不退と念不退と處不退との四位あり。位不退とは位とは即ち一度自性の眞理を信認したる上には退轉せぬことなり。即ち如來の光明をたしかに信認したる上は、たとへば一旦鍊出したる金は泥の中に埋没すとも金の性は變せざる如く、一度如來の光明を得たる精神はたとひ煩惱泥中にありながらも、其精神に赫耀たる處の心光はくらすこと能はず、いか成事情の爲にも精神に照しわたる如來の光明は決して退くべきものにあらず。之を位不退と

云ふ。

行不退とは如來の光明を行の上に現はすことなり。是は先の位不退にくらぶれば一段すゝみたる位にして、よほど修行の功を積まれざればかたきことである。いかにとなれば人或時は其行の上に於て全く如來の光明を現すことが出来るけれども或場合には退くことがある。先の位不退は精神に認めたる光明は決してまた信を失ふようなことがなければ光明を實行に現はすといふことは、立派に行に現はすこともあれば、またそうゆかぬこともあるなれども、如來を力にしてすゝむ時は何分かづゝをすゝみて、身と口と意との行爲に光明を現はすことに成り申べく候。

且つ稱名の行位が退轉せざれば自から行不退とは成りぬべし。

猪武者の、よこひら見ずに一心に一向に如來の光明によりてすゝむ時は、必ず如來の大法身によりて光明によりてすゝめ玉はんことなりと信じて、而して今年は猪のように、光明の中に専心にすゝむことにせまほしく候。

一一九

いければ念佛の功つもあり、死なば浄土にまいりなん、兎てもかくても此身には、おもひわづらふことぞなき。

との御言の意は、

たゞ大みおやの御慈悲にうちまかせて、たとへ病のために身はせめらるゝとも心だに大みおやの慈悲の懐のなかに安住せられなば、餘の事は兎にも角にもにて候。

實に頼みがたきは有爲の世、期しがたきは四大假和合の身、また五六日前は法會に來りて盛に説教したりし僧が昨日は腦溢血にて忽ちに黄泉の旅路に立ようなと、健康とても頼みにならず、まことにおくれ先だつ世の習ひ、しかしながらあなたが先なるかまたいま健康といふ私我先なるか、決して自分の計らひにゆくものならず、たゞ大みおやに一任し奉るのみ。

此土一日一夜の辛抱は浄土に於て百歳するよりも勝れたり。百歳の功よりも勝れたる一日

一夜なれば、苦しなからも如來を離れぬように稱名し候ことを御すゝめ申候。
ならくがに久しくうけむ苦しみをすくひかへてぞけふのいたつき
無始よりの積もりし罪にくらぶればいかに輕きぞけふの病は
かぎりなくならくに落るつみとがをはたさん爲やけふのくるしみ

一〇〇

念佛救世大慈父とて、如來は我々衆生の爲に大慈のをやさまである。若しもみおやの慈悲を以て子を愛念するの思召なかりせば子はいかにして常没流轉の中を出ることができませう。

人類にしても、親の慈悲てふものなかりせばいかにして子どもは成人できませう。親の子を愛する深きより、子の啼くをも、またいかなることともいとはず兩便の不淨をも敢て苦にせずして育てるは是只慈悲心あればである。そのことは實に自分勝手のあさましき此凡夫を、また心のけがらはしき我々を却てあはれみ、ことに愛して、あさましき子どもが、親のもと

をにげ出して、自から三惡道に入るべきをも、飽までたすけんとの親心である。世間にも親は子をおもへども子はさまでに親をおもはず。

念佛とはかくまで慈悲ふかきおやさまを心に記憶して忘れまじとのこゝろなり。

念法とは法とは軌持の義とて自然のきままりを云ふ。たとへば火は物を焼き水はうるほすなど是きまりなり。

佛を衆生が念すれば其念の中に佛が感じ來るは法である。天の月が水に感應するごとく佛を念すれば佛が我心に感應する。又梅をおもへば舌が自然に濕ふも自然の法である。佛を念すれば恩寵のありがたく感ずる自然の理なり。すべて理のとほりを法といふ。

たとへ佛が在しても衆生の信仰に應ずる自然の理法がなかつたならば衆生が佛に成ることは出來ず。自然の法があればこそ念佛三昧の法が最も法中の王である。その法をおもふて忘るゝなといふことを念法と申候。

念佛とは僧は和合とて、佛と法とを以て我心として居る人のことにて、生れたまゝの心普通の人間である前の心をしてゝ、佛といふ親の子となりし心に生れ更わり、法を以て我心と

する人である。

たとひ佛と法はありても其佛と法とを維持して人に傳へる人がなくては此すくひにあづかることが出来ぬ故に、我に法をさづけて我に道の心を發さして呉し恩人であるから、常に忘れぬといふが即ち念僧と申候。

佛は十方三世諸佛數多ましませども大本は只一人のあみだ如來、分身が十方諸佛にてまします故に、一人のあみだ如來を念じ奉らば十方の一切諸佛も同時に念ずると同じ利益なり。法に世法佛法とて、佛法とは衆生を佛にする法である。無量の法門はあれどもつまり我を佛にして呉るを要とすれば、大悲のおやさまから私どもを助け下さる念佛の法がひとり大事である。此念佛三昧ひとつにて我が佛に成ることが出来る故、我ためには念佛三昧の法を最も大切と申候。しからば一切の萬法は自然に其法の中にをさまりて居るなり。

一一一

みおやの光に清められたる中川（註—弘道）上人よ。吾人が主張する光明主義の御質疑に對して、安心の大意を演べて主義を明かにせんとす。

信條の三條件を明せば、一、所求。二、所歸。三、方法。

一、所求とは、信仰の要求する所は、みおやの光を獲得て、光明生活に入るを目的とす。光明を被むる時は、從來の盲目的生活より覺醒して、みおやの光明中の人となり、現在を通して永遠の光明に入ることを得る。人の天性は六根は染汚にて、感情は苦惱である。知は無明にて、意志は罪惡である。我等が生れつきもつてをる弱點は自分の力にて除くことが出来ぬ。唯みおやの清淨と歡喜と智慧と不斷との光明の攝化を被むりて光明中の人となることを得る。光明中にも肉體ある間は精神的に光明中に生活し、命終る時は現實的に光明土の人と爲り得る即ち淨土に生るゝことである。

二、所歸の本尊。彌陀尊は絶對的の中心本尊にましまして、現在未來を通じて唯一のみお

やにましせば、無量無碍の光明を照して念佛の衆生を攝取し給ふ。我等が肉體は太陽の光に活かされてある如く、我等が心靈は彌陀の光明に依りて活かされてある。

如來は見と不見とに係らず、眞正面にましますことを信じて、其照鑑の下に、精神指導されつゝあることを信すべきである。是の如くに歸命する本尊を確信すべきなり。

三、去行こぎょう方法。とは如何なる方法を以て、みおやの聖意にかなひ、光明の中におさめらるゝかとなれば、唯本願の名號を稱へ即ち念佛三昧を以てす。如來の慈悲は我等が心に入り我等が信念の心は如來の中に入り、見と不見とに係らず、一心に念佛して、如來の慈悲に同化せられんことを要す。常に如來の中に在り光明の生活を得、肉體終れば報土に生ずることを得。

要する所、光明王を本尊とし、光明名號を稱へ、光明中に生活するを宗趣とす。(尙號を追て明すべし)

一一三

みおやの光明のなかにますく麗はしき御ひくらしのほと大慶此〇〇候。

さて先日昇堂の砌には厚き御供養をめぐまれ多謝候。今日廿一日久保山にゆくことに候。

みおやの光の中川弘道氏の質問に對する答は（一九五頁参照）本月のには只通して光明主義の安心の要領をのべて、來月の（註—みおやのひかり）に起行の用心として、見佛は本宗の宗とする所、結歸する所の見佛にあることをのぶることにいたし候。（註—みおやのひかり誌上に其後御發表無し）

今日は直に久保山にゆくことにいたして失禮致候。

來二月十五日より清水實相寺にて教區講習會兼て別時三昧をつとめ候につき出張致候。其前御寺（註—笹本上人寺）へ參上候。余は後便に申上候。

聖善導は教へ玉ひし、

今日晨朝に佛は救世の大慈父なりと念ぜよ。と。

先づ朝起きて嗽浴して、朝日輝く如くなる救世大慈父を至誠心に祈念して、今日一日あなたの御慈しみと御力とに依りて活き働き在ることは、あなたの大慈光に攝取せられて、あなたの聖意に契ふやうに、此靈のますく發達して、御子たる分を盡し得らるゝやうに育み玉ふあなたの聖意に報ふべき今日なることを忘れぬやうに、毎〇晨朝に先づ第一に之を誦せよとの御すゝめ實に有りがたく信じ候。

本とうにおもへば、我等は頑是なき幼なき兒なれば、どうしても大悲のオヤサマを離れては、心の闇のために直に三惡道の恐ろしき方におのづと趣く心意なれば、是非とも大悲のみおやをたよらねばならぬ身と信じ候。

年末來當地に來りて、願くは人々に、大みおやの大悲を傳へて、佛恩を報じ奉らんと、一

にみおやの加被を蒙りつゝ、大みおやを紹介いたし候へども、みおやの聖意に充されずして私の心を以て、みおやの聖意を宣傳する爲にか、聖意が人々にまだ聞へぬことにて候。何人とても大みおやのお慈悲は信ぜねばならぬ法なるに、いかなれば聖意にたよる人の少きものにてやとおもはれ候。實に無始曠來みおやの暖なる慈悲の懐に入ることができず、淺ましき六道に流轉し始めて一度人身を得たるも餓鬼畜生に在りて習慣づきたる習氣まだ除かず、たゞ終身肉の奴隸となり煩惱の眷屬となりて、可惜人生を闇黒裡に葬り已る人のみの多なるには實は憐れに耐へず候。

願くば遣る瀬なく憐れみ玉ふ大悲の聖意を人々に宣べ傳へて、またと再度得難き人生を徒らに葬り去らぬやうに人々に御傳へのほどを望ましく候。

此肉體は太陽の光によらずば活ること能はざるが如く、我等が心靈は大慈父の光明に依らざれば靈活のできぬ身なれば、此みひかりのなかに、ますく靈に活んことを願はしく候。

世に御名を以てたよるほど親はしく且つ適切に感ずるみちは之なくと存し候。世間に於て

はいかに悪口罵詈を被むりても、其人の名を以て罵りしにあらざれば、誰人を彼は罵り居かとおもへば左ほどには感じざれども、若し其人の名を以て罵る時は、其本人の胸に、適切にこたえることにて候。また人を稱譽するに於ても然りと存じ候。されば我らは直ちに、大慈の父よナムと念ずる心より、アミダ佛と云ふ聲は、いかに大悲の聖胸に響きますと存じて頼もしくて候。オゝ大慈の父よ、みおやよと、一にたよりて、呼びまつる時、大慈の笑顔眼前に髣髴として有りがたくもまたなつかしくもおもはれ候。

徳本行者の、

あみだあみだと聲する人のむねに佛のたへまない、との道詠は、行者のむねに充てる佛おもひの燃つゝある心のほど見ゆるやうに候。

尙くさく／＼申のべたき事は本月中に御目にかゝりし節に譲り候。

御院内（註―横濱慶運寺）皆様に大ミオヤの御名を以て宜敷御傳へのほど希候。

一一四

初夏の暖氣に養はれて茂る草木を見るにつけても先つおもはざるを得ざるは、

大みおやの慈悲にはぐくまるゝ我らは、何ぞ意識なき植物ばかりに、靈き心のはえやらぬぞとおもふときは、やはり深き御慈悲を仰ぐの外（ ）なきに聖き名を稱えて御慈しみをあふぎ（ ）ていよゝ我きよき同胞衆と共に、大みおやの御慈悲を味ふ日の近づきしを悦ひつゝ明六日におそく相成候へとも昇堂仕候間御通知申上候。

一一五

如來歡喜光裡に新しき年を迎へ、無重壽の聖名をたゝえて壽ほぎ奉る。

すべての事は因縁に任せて、たゞねがはしきは念佛三昧の事に候。又ねてもさめても如來と共に寢食を爲し、光明のなかに行住し慈悲の裡に坐臥し、たとひ寒風肌を裂く朝にも慈悲の懷に住するこゝろは暖かに、（ ）塵埃萬丈の中にも清淨光のなかに在る神は潔白に

候。

年來れども新しきを覺へず、つもごり頃より佛念（註―佛念）三昧に入候。去年中のたのまれしものを果すことにつとめ（）候。

一一六

吾祖聖人の安心起行の形式を唯言語文字の上のみ學んで、吾祖の宗教的精神の内容即ち靈的實質を習ふ宗徒のまことに稀なるは、いと嘆かはしきことにして、宗祖の外殼のみ遺りて核實の無きは、遠く未來に繁殖することなからむ。吾曹は吾祖の靈的内容を習ひ實質を修養せむと欲して止まず。

吾祖の靈的内容は祖の道詠に由つて聊か窺ふ事を得。御法語の安心起行の言語は其形式を示したるも、道詠は道情の内容より漏れ出でたる靈的表現にして、實に心靈々化の麗はしき、即ち形を見れば法然房、實を云はゞ阿彌陀如來と、當時の世人に讚美せられし事を窺ふに難からず。

吾祖と雖も形體は四大和合の物質、若し解剖上より見るもまた生理學上より撿るも、何ぞ夫れ一般の人間と擇ぶ所やある。亦化學の上からは十四元素にして一元素も多少なからむ。宗祖の形を見ればとの謂は右らの事實には、を云はゞ阿彌陀如來とは、彌陀の光明に同化せられたる靈的實質なり。

今宗祖の道詠の中に就いて一首を擧げて吾祖の靈的内容を窺はんか、

阿彌陀佛に染むる心の色に出では 秋の梢のたぐひならまし

吾祖初めて専修念佛の一行に入りて數十年、口に稱ふる所は光明名號、意に念ずる所は如來の靈籠、漸々に薰習功積み徳累なり、つひに彌陀の聖意に薰染し、靈化の内容はむかしの法然房の其れならで、今は彌陀の權化。昔は黒谷の禪房に在りて一切の佛教に目を晒し、般若を繙く時は皆空の理に心をつくし、華嚴を研究せし時は事々無碍の教判に思を凝しなど、縁に隨ひ境に伴なひ、智慧の眼は或は炳きたらんも、宗教的實質の心情の眞髓に於ては未だ眞の靈的道情にはあらざりしならん。

然るに彌陀三昧を久しく修して、薰染彌深くして益其麗しきを呈し。君も其内容が目にも

見へむものならば、昔學窓に〇々たる心とは異にして、今は彌陀の光明に美化せられ、秋の時雨の度毎に、いよ／＼色の濃くなりし、から紅になりける如く。感覺としては八面玲瓏として六根清らけく、また其靈化の意志金剛石の磨きしに太陽の光の映寫して光色晃耀として極みなく輝き、感情には彌陀美化の内容は歡天喜地、彌陀他受法樂の加はる所、法喜禪悅の妙味を覺え、歡喜と平和とを得て、身は娑婆に在りながら心は淨土に栖み遊ぶの感。智力には自ら彌陀の光明に開示せられて、佛法の眞髓は自ら悟られ、まことに智慧第一の譽は、是彌陀の智慧光が吾祖の腦漿を通して光りし結果ならむ。意志には彌陀不斷の大光明に靈化せられて、金剛の意志はいかなる苦難の中にも泰然として餘裕あり、老軀の流罪をも却つて朝恩と感ず。

この餘裕あり實に其麗はしき事何に較べむ。秋の紅に例することは謙色の深きなり。日月双照するにも比すべきものをや。

倣ふべし吾人は祖師の内容を。學ぶべし吾祖の實質を。唯形式の文字の解説に巧なるも、內容實質に於て習ふことなからば、いかでか祖意にかなはん。

今辨榮、越の皎雪を凌ぐきよき同胞なる淺井（註―法順）尊宿に贈るに、吾祖の道詠に就き
管見を陳べて、九蒼の一分を味はひし事を告白す。

117

欽復

（前略）

願くは御地に如來光明中に生活する人々の多く御導下され度候。

衆生の方からは、此處と淨土とは暫く隔つやうにあれど、如來さまから見れば、十方法界
悉く同一の慈悲の光明の中におさめなされて在ます。

大光明中に在りながら、我等自ら業障深重にして、さは知らぬことにて候。

一心に念佛して信仰の眼開く時は、寐てもさめても大悲の懷のうちに在る事を實感せられ
候。

如來は大慈悲の父にてましますれば一切の處に存在し給ふ。されば觀經に如來是法界身、一
切衆生の心想中に入り玉ふと。

また導師は、彌陀身心遍法界、映現衆生心想中と讚しなされ候。

一切の處に遍在する如來なれば、是非共今世から、大悲の懷に住み慈悲の御顔に接したいと想ふて、一心に佛を見んと欲して自ら身命を惜まされば、現に現はれて說法したまふと。

それでも、逆も此世ではおがみ申すことができぬから、死後未來にておがみたいと信じて安心決定して、念佛して、疑はされば、必ず未來に於て、見佛することはできる。たとひ見佛はできぬとも、現在大光明中に生息する我なりと深く信じて、寐ても寤めても光明中の生活に入りなされんことをこひねがひ候。

斯の光に遇ふものは三垢消滅し身も意も柔和にして人格も圓滿になり、而して歡喜の生活をなして善心即ち道德心を以て行爲するやうになると經に示され給ふやうに。

共に共に進まほしく候。

如來の光明は眞理にしてよく人に高尚なる理想を與ふ。理想とは自分の目的に對する靈的の計畫なり。將來に對する設計の如き、例へば我は女として紫式部の如き獨立志操を全うせんとか某夫人の如くに美しき家庭を造らんとかいふ如き。さて高等なる宗教の光明に上らざる理想は野卑なる世俗的たり。肉のために奴隸となり名利の爲に屈伏し、俗的の氣位は高くとも、名利の奴、肉の従僕と成ることを免れず。

如來の光明によりて高尚なる理想を有する人はよしや肉の生活は卑くとも、心情にいと高き一點の光明は内面に赫耀として侵すべからざるものあり。宇宙最高にありて照せる如來の光明に照らされる己が心情たる理想は高し尙し。平々凡々の金にぬかづき財に拜するすべての名利の奴隸とは天地の懸隔あり。

即ちいわばいける觀音として其胸懷に如來の光明より輝き來る心情にいと高きいとうるはしきえも言はれぬものを宿すなり。

あみだ佛の聖き光によりて光りかゞやく情を有するは活けるくわんぜおんなり。

いける觀音として如來の聖き光より湧きいづる泉のようにいときよき水を胸憶に流注せしめよ。高尚なる理想は即ち觀世音なり。いけるぼさつよ、高き理想の月は其頭にましくててらすにあらすや。觀世音よ、其麗き花は家の庭に咲き其馥はしきを廣き世に薫することよ。

如來の聖き光はいかに永遠なるかな。いかに廣大なるかな。其のみひかりは吾共にかぎりなきまでに希望をおこさしむ。斯の靈光によりて吾々に眞善美の極樂の望をおこさしむ。世に極樂の生を希ふほど遠大なる望みやある。極樂の世つぎたらんことを希望して、いかなる苦難をも忍んで其望を圓かに満足せしは釋迦尊なり。吾々は釋迦尊の教に隨ひて淨土の世つぎたらんことを望むなり。

吾々はミダの本願に乗じて極樂に生ぜんことを終局の目的とす。

ミダの光明によりて心の更生せんことを一大事とす。

人はかゝる遠大なる希望なしに生活するが故に、遂に煩惱の奴隸となり肉慾の満足をもて

目的とし終身金錢の爲に魂を奪はれ、それ已上の目的なしに淺ましき希望のために走使せられて苦樂をなめ、肉慾我慾の二面に於ていつれなりとも目的達したる時には歡びしからざる時は憂ひなやみ、終局の目的は肉躰と共に消果るものとして明朝死すと思へば今日飲食するにしかじなどゝいうような、佛教にいわゆる餓鬼根性に墮落す。

如來は光明によりて吾々に精神上の永遠の生命と無限の道德に進むべき希望を發さしむ。其希望とはいかに、

信仰の目的は佛陀てふ偉大なる人格となる爲なり。釋尊や觀音の如くになることなり。偉大なる人格と成らんには是非至善に向はなければならぬ。如來の光明を力にして日々に歩々に善に向て進みゆくなり。觀音の如き偉大なる聖者と成らんにはいかなる艱難も困苦も是が爲に己が精神の磨けることを歡ばねばならぬ。

鐵も火に焼かれうち鍛へられざれば名劍と成ることができぬ故、佛遺教經には若し人來りて我を罵詈し我を打挫し骨や節が解くるようなりとも、却て之を歡ぶこと甘露を飲が如くに歡ぶものにあらざれば入道智慧の人とはいわれじと説玉へり。

いかにして之を甘んじて忍ばれるとならば、それが爲に精神の徳をうることを歡ぶなり。
人は遠大の希望の中に生活が出來うれば肉の幸福よりは道徳の偉大たらんことをねがふ。
肉の幸福はやゝもすれば道徳に反對することあり。たとへば富貴なる時は傲慢となり懶惰となり、人の苦に對してももひやりなくなり易きが如し。

一一九

時間は寶なりと知るべし。古人云へり、今日學ばずとも明日ありと思ふて、明日を樂しむことなかれ。今年つとめずとも來年有りと曰ふことなかれ。今年空しく過るときは來年もまた虚しく經るにいたらん。今日より別に勉むる日なしと思ふて時間を千金よりも重きものと知るべし。寸陰を貴みてよくつとむる人は後に必國の寶といふべき人と成るなり。時間の寶を積かさねて尊き人と成り得たりしなり。時間を浪費するものはとても世に功を立てべき人となること能はず。

寸陰を惜しみて能く學びよくつとめよ。月日は再び復り來るものに非ざればなり。此尊き

時間は聖き如來の賜なれば猥に捨ては罪甚だ重し。如來は貴き時間を與へて尊き人を作らんための聖慮にましますことゆめく忘るべからず。

習より善き人を作る。人の心性は神聖なる如來の賜なり。如來は聖き人と爲さんが爲に靈性をあたへられたり。

習慣は第二の天性ともいふて善と惡との反對の性格を作り出すものなり。善き習は靈性を顯發し惡しき習は靈性を覆ひかくし穢らはしき不正なるものなり。此についてはいとけなき時の習はしのと大事なること決して忽がせにすべからず。神聖正義の如來の聖慮にかなうように、靈光のなかにありて常につくしみよくつとめ、やがて善き習がよき人となりて國家のためにつくし、後には眞善美の極なる國に生れて佛の世つぎとならんこと望しけれ。

日々に三たびよく省みて、今日のふるまひ心性を汚さざるや否や、今日のつとめ如何にありしやを知るべし。

聖きみ名をとなへて聖旨のわがころのうちにあらはれんことをいのり候こと忘れたまうなかれ。

聖きみむねの我ころにあらはるゝよふは、如來のみむねは神聖なり智慧なり慈悲なりすべての徳のみたせ玉ふなり。

如來の神聖を我ころに思へば我ころも如來の眞理の光りのなかに良心が自から正だしく道徳心となり來るなり。

如來の慈悲が我ころにあらはるゝとは、慈とは樂しみを與へ玉ふこと、悲とは苦しみを抜き玉ふこと。しかれば如來のみころの顯はるゝ時はたとひころのなやみのなかにも自から慰安を與らるゝが故になやみが失せ慈によりて自から何となくありがたく樂しくやすらかに來るなり。こなたの陥りたるころに對しては非常なる勇氣をあたへ玉ふ。

憤怒のおこりし時はなむあみだ佛の御名によりて御むねのあらはれを念する時、大になだ

めの聲として我胸にあたへ玉ふ。

すべての事としていか成ることにても如來より見玉へば、決してえらいことはなきものなれば、必らず我に安きを與へ玉ふ。

つねによろこびのこゝろを奮起すべし。よしや身にさまざまの苦難があらうがまゝ、其なかに於ても如來の大なる御めぐみをよろこぶことを失ふべからず。

さればとて人の愁を喜ぶにあらず。佗人に對してはすべての同情を有つべし。ますく信念すゝむに隨つていか成る場合にもうるはしきいろ變らざるように如來はなされ玉ふなり。

人は一生の歴史のうちに、種々の事を歴て練磨したるものにあらずば、完全に精神が發達しました立派なる道德的意志も出来るものにあらず。随分困難をも經快樂をもいか成ることも通り越して、いか成ることに耐得らるゝ精神となり自から艱難をも經驗してこそ、佗人へ同情即ちおもひやりの心も生ずべし。如來の慈悲に安住してぞ耐忍も出来るようになり。自からさまざまの苦を経た人は何をして我まゝになり易き心も鍛へられて、いか成ることにあふとも、精神に於て何にも換へがたき御恵みを得たる身のほどをよろこびて、ますく信

心増進してこそ眞の信仰も道徳心も出來得べきなり。人はいか成る苦難多き身なりとも、それを苦にせぬ程の信仰心だに出來得るときは決して不幸福にあらず。

なに事も苦にせぬ如きは全く恩寵獲得してのことなり。如來はあなたを金剛の信眞實の道徳心を成就せしめむ爲に、さまざまの機會をあたへ玉ふことなるをしかと用意し玉へ。

あなたを苦しめむためにあらずしてあなたの精神の光をあらはさんが爲なることを忘れ玉ふなかれ。百たび火にやかれ千たびうちたゞかれて鍛へあげたる鐵は正宗の名刀として世に珍重せらるることをおもひ玉へ。

願くばますく御増進あらんことを。

一一一

月日に關もりなく、すぎゆくことのすみやかなる、もはやことしも秋のはじめとはなりぬる此ころ御病容はいかゞに候や。御自重いのり候。

この娑婆世界にてまぬかれがたきは老病死の苦おもへばなに事もみな夢まぼろしの境、い

かなる榮華も春の夜の夢、名譽とか光榮とかも同じくかげろふいなづまの光の間。たゞわするまじきは一大事にて候。

幸に彌陀超世の本願にあひたてまつり、かの本願を一とへに信じて、名號だにとなへなば、このいのち盡きぬる日には、直ちに七寶莊嚴の淨土に往生することの幸福を得ることをおもへば、余の夢のよのことは何事か心にかけるほどのものかあらん。まづはお稱名のみなわすれたまひそ。

なむあみだ佛

御慈悲のたより

終

辨榮聖者畧傳

編者謹誌

大ミオヤの無盡の大悲に催ほされて、此の土に輝き出で給ひし辨榮聖者は、安政六年二月二十日下總國鷲の谷の念佛者山崎嘉平氏の長男に生を受け給ふ。家に在りて農事に勵み學業を好むこと世の常ならず、十二歳の時彌陀三尊を空中に想見して憧懼の念に堪へず、竟に明治十二年二十一歳にして出家の素志を遂げ、近村東漸寺の碩學大康上人に師事し、毎夜熟睡三時間の外は雜用に學問に忙しく、貫くに念佛一行晝夜斷え間なく、或時は手の平に油を入れ之に浸したる燈心を燈し、或時は腕の上に線香や蠟燭を燈して佛前に供へ、以てその忍力佛道修行に堪へ得るやを試し給ふ。東京に遊學して卍山上人に就きて華嚴を修めし央ばには法界觀の三昧圓かに現前し、明治十五年筑波山に籠りて至心念佛の曉には見佛三昧了々と發得し給ふ。爾來一舉一動全く佛法に相應し、施、戒、忍、進、禪、慧、缺くることなく、大康

上人の意を繼いで五香に新寺創立を志し明治二十七年本堂落成に至るまでは、雨漏る廢家あばらやに夜も燈無ければ線香の火を頼りに聖畫を描き、嚴寒にも重ね着せず藁わらを積んで蒲團となし、超然ちようぜんとして勇猛ゆうめうに稱名しょうみょうし給ふ。建立こんりゆう寄附も一人一厘の結縁けちえんとして遠近あんぎやを行脚も中若し貧窮者に遇へば月日重ねて喜捨きしゃを積みし金米全部之に施して更に又一厘より勸進かんじんを始め給ふ。途を踏むに蟻ありは勿論若草までも懇ろねんごに之を避け、大康上人の訃音ふいんに接しては即座に追恩別行に入つて不臥ふが念佛一百日に及び給ふ。更に一切經讀了。明治廿七八年印度に渡りて大聖だいしようしやくせん釋尊みあとの御蹟みあとを巡拜し、歸朝しては東西に巡教し阿彌陀經圖繪あみだきようずえを施し給ふこと廿五萬餘部、普く米粒名號みようごうを施してかりにも一聲稱名の縁を結び給ふこと實に無數、難化なんげの有縁うえん一人の爲にも數年方便ほうべんして猶措かず、寺の禮遇れいぐうを辭り態々わざわざ下男室に夜を明して勸化かんげの縁を求め、夜寒の町に貧者を訪れては當日供養をうけし下着を脱ぎ與へて如來の大慈だいひを喜びあひ給ふ。日毎夜毎の傳道に疲れし色もなく忙中ぼうちゆうに僅わずかの閑を得ては如來の尊像そんぞう教化の御文に筆を

運び、汗血のにじむ慈悲の雫が幾千枚、その奉謝の金は悉く會堂の創建となり學園の創立となり數萬の文書數十萬の禮拜儀の施本に充て給ふ。食卓の上浴室の中至る所皆説法の道場にて、一所不住の年中巡教極寒極熱一日の休養もなき間に宿所の縁に随つては古今の書籍近代科學に至るまで孜々として研め給ひ、又畫、歌、音樂、五筆の書等諸技悉く利生の方便ならざるなし。靈應内に満ちて、念々不捨寢息まで自ら稱名する程なりし間にも説法に非れば讀書、讀書に非れば書き物、實に一寸の光陰も爲すこと無くして過し給ふことなく、集る淨財は悉く利他の用に供へて反古紙一枚をも節約してその裏に原稿を書き給ふ。一切の時一切の處、たゞこれ佛作佛行、寸隙なきその御行狀に接しては始め尊大に構へし人も皆恭敬して其の教に類かざるなく、諸宗は勿論耶穌教の牧師に至るまで發心してその門に入る。首唱し給ふ光明主義の光萬民に被る所、念佛三昧各地に盛に行はれ入信の行者幾萬皆悉く値遇の御恩を感泣して盡未來際の願行に奮ひ立つ。超えて大正九年吹雪に更くる北越

の夜寒身に沁む勸化かんげの旅に老いの御聲に盡きぬ如來の御慈悲を傳へて最後の三昧會さいえを木枯悲しき柏崎かしわざきに導かれ給ひし十二月四日遷化せんげし給ふ。

仰ぎおもんみ惟ただれば内證ないじやう甚はなはだ深く外用げゆう亦廣大に、全分ぜんぶん度生どじやうの無我むがの力が無作むさの精進しやうじんに顯れ給ふ辨榮聖者の御一生は、如來光明のさながらの反映えんえいに在あれば、誰か大慈悲の靈應りやうおんを仰がざらむ。誰か光明の攝化しやくげを信ぜざらむ。

(非賣品)

御慈悲のたより下の巻複製自由
昭和二十九年八月二十九日印刷
昭和二十九年九月二十一日發行
編輯兼發行人埼玉縣北葛飾郡櫻
井村字下椿三九三番地田中木又
印刷人東京都千代田區神田神保
町三ノ一〇番地春山治部左衛門

發行所

埼玉縣寶珠花局區内北葛飾郡櫻井村
倉常寺内(東京より臨時移轉)

ミオヤのひかり社

振替東京六六八五一番

辨榮聖者御入滅七十周年 記念出版

仏陀禪那弁榮聖者御著

『お慈悲のたより』中・下巻

平成二年七月四日 復刊

編者 田 中 木 又

発行者 光 明 会 本 部

発行所 光 明 会 本 部

〒659

兵庫県芦屋市六麓莊町二〇―二〇
電話 〇七九七―22―四九〇―一番
振替 神戸 二―六四番

印刷所 東進印刷工業株式会社